

中国・韓国・日本出土の馬冑と馬甲

神谷正弘

はじめに

馬冑・馬甲の研究は1957年、和歌山市大谷古墳から馬冑・馬甲一組と華麗な大陸製馬具・装身具が出土したことに始まり、馬冑・馬甲研究の出発点となった。発掘調査と遺物整理は京都大学考古学研究室により行われ、1959年に刊行された『大谷古墳』の報告書は、その後の馬具研究に大きな影響を与え続けている。以後、永年にわたり馬冑・馬甲の出土例はなく、研究の進展はみられなかった。

韓国釜山市福泉洞古墳群の発掘調査が1980～81年に行われ(釜山大學校博物館1982)、同10号墳から馬冑が出土し、類例としては2例となった。ついで1991年には埼玉県將軍山古墳出土の馬冑資料が報告された(若松良一1991)。また、1985年から始まった韓国陝川玉田古墳群28号墳の発掘において馬冑・馬甲が発見された。以後、玉田古墳群では、1992年まで継続した発掘調査で馬冑6点・馬甲2点が出土した(慶尚大學校博物館1990・1992・1997・1999)。この時期、韓国各地で盛んに行われた古墳の発掘調査によって馬冑・馬甲・甲冑・武具の出土が相次ぐようになり、研究者によって論文が次々発表された¹⁾。

1997年に中国でははじめて遼寧省朝陽市郊外の前燕時代に比定される十二台郷磚廠88M1号墓より、鉄製馬冑・馬甲・馬具・甲冑が出土し(遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館1997)、注目を集めた。ついで1990～2003年に行われた吉林省集安市の高句麗王陵の調査により馬冑・馬甲・甲冑・馬具・装身具が出土した(吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004)。従来資料の少なかった高句麗墓出土の第1級資料が報告されたことで、ようやく中国三燕時代・朝鮮三国時代・日本古墳時代の馬冑・馬甲の資料が出揃い比較研究ができることとなった。

小稿では高句麗・新羅・加耶・中国・韓国・日本出土の馬冑・馬甲を通じて、その系譜と文化史的意義を論じてみた。まず、前燕時代に比定されている十二台郷磚廠88M1号墓、喇嘛洞I M17号墓出土の馬冑・馬甲から記述し、高句麗の国都、輯安禹山992号墓出土馬冑、高句麗古墳出土馬甲を概説した後、現在、最も出土例の多い新羅・加耶諸国の馬冑・馬甲の代表例を挙げて、日本出土の馬冑・馬甲について記述を進めることにしたい²⁾。

I 中国遼寧省朝陽市域出土の馬冑・馬甲

中国では鉄製馬冑・馬甲の存在は文献・騎馬俑・壁画などから判明していた。十二台郷磚廠88M1号墓、喇嘛洞 I M17号墓から馬冑・馬甲が出土したことによって考古学的研究が始まった。

1. 十二台郷磚廠88M1号墓

朝陽市の南郊に広がるなだらかな丘陵地帯(標高約100m)に位置し、レンガ工場の土取り作業中に発見された。付近一帯には前燕時代の墳墓が分布するが大型墓は少ない。

墳丘の状態は不明だが、発掘された石室から推測すると、丘陵斜面に西方向(平地方向)へ向かって石室掘方と墓道を掘り、朝陽市一帯で見られる緑色砂岩を板石状に加工して、石室を構築している。明らかに塚室墓を模倣している。長さ約0.6m、幅1.15m、高さ1.4mの短い羨道を造り、羨道入口を大板石2枚で閉鎖している。石室平面は長い台形で石室入口幅が広く3m、奥壁部の幅は狭く2.5m、横断面は蒲鉾状の天井で、長さ4.9m、高さ1.7mを測る。墳丘は存在したとしても低かったと思われる。壁面には黄泥を塗付して、その上に白灰を塗り、石室床面も同様の板石を敷き白石灰を塗っている。石室のやや奥壁より長さ2.15m、前部幅0.8m、後部幅0.48mの長台形の漆塗り彩色棺を置いている。

棺内には帯金具・装身具・馬具・盛矢具・陶器・土器を副葬し、棺外には鉄製挂甲・蒙古鉢冑(鉄留)・馬冑(鉄留)・馬甲を副葬している。

馬冑(図1-1)

この馬冑は、全長66cmと大きく、土圧のためか馬冑本体はやや右側に歪んでいる。面覆い部は角張って横断面も台形を呈しているため馬の頭部の外形を巧く表現していない(高さ11cm、幅13.7~26.9cm、底部高さ25cm〈底部の宝珠形飾の高さ6cmを含む〉、眼孔長径7.4cm)。鼻先はやや膨れ気味になる程度で、鼻先のみ幅約1cmの薄い鉄板で覆輪を回し鉄留している。眉間板の覆輪上に小鉄板を鉄留して、馬の鼻先を防護するための半円形鉄板(全長8cm、幅7.5cm)を、横長方形孔に通して取り付けられている。現状では半円形鉄板は斜めに取り付けられているが、これは保存処置によるものである。本来は、開閉自在に作られていたと見て良い。面覆い部は中央部で「へ」形に角度を付け、眼孔部で幅が広く平坦になる。眉間板は鼻先部が広く底部近くで幅が狭くなり、眉間板1枚と側板2枚をほぼ直角に折り曲げて底部を形作る。面覆い部と底部を同時に作る技法である。左右の眉間板に側板を鉄留して、側板のやや後方に眼孔上部を作っている。眼孔の前後には頬当と連結するための小鉄金具を2個ずつ鉄留し、細長い環状にした鉄棒を通してある。面覆い部と、底部を同時に製作した後、底部の周縁板を鉄留めする合理的な製作方法である。

全体的な形態は、直線的で馬頭の特徴を巧に表現しているとはいえない。これは眼孔上部

のふくらみと、馬の食槽を打ち出していない点からも判る。眉間板の底部前9cmの所には小鉄片があるが付着したものであろう。

底部は後方に傾斜しており、宝珠飾りのある幅4～5cmの鉄板を眉間板・側板の周囲に回し、銕間隔をやや狭くして銕留している。底部の眉間板と側板に銕を4ヶ所しか打っていないため強度を高めるためであったと思われる。底部中央にある宝珠形飾りは、同様の装備で対戦した場合敵味方を識別するための装飾であろう。

頬当は4枚の鉄板で構成される。ほぼ半円形のもので全長36.5cm、幅18.7cmと大きい。まず3枚の鉄板を銕留で結合した後、幅広い周縁鉄板を銕留している。1枚目の鉄板後方に眼孔下半部を作り、前後に面覆い部と同形の金具を銕留して、頬当と面覆い部を細長い環状にした鉄棒で連結している(図1-3)。周縁鉄板の3ヶ所に半円形小鉄板を3銕で固定し、鉸具を通してしている。

肉眼で見る限り、馬胄表面には漆などの塗料の痕跡は認められず、裏側にも裏地などの痕跡はなかった。製作技術からみて、馬胄を製作し慣れた技術者と思われる。

この馬胄は、大谷古墳馬胄に見られるように馬の頭部の外形に合わせて流れるような曲線を表現し、馬頭部の特徴を誇張する形状ではない。但し銕留技術は高く、面覆い部と底部は同時に作る合理的な銕留をしている。

馬甲小札(図1-2)

鉄製小札類は1000枚余出土しており、挂甲と同位置に副葬されていた。11種類の鉄製大型小札が報告されている。小札の厚さは記述されていないが、約0.1cmと思われる。

1の円頭長方形小札が最大で、全長15cm、幅4.5cm、威孔は径0.2cmで計13孔である。上端中央に上下2孔一組の孔をあげ、中央上半に1孔あけている。中央の孔は縦の威孔である。上部と下部の両端に2孔一組の孔を上下にあけている。下部両端には1孔ずつあけるが、横の綴孔であろう。2の小札はやや小さく全長12.7cm、幅4.5cm、威孔は13孔で孔の位置も同じである。3～6の小札には大形と小形のものがある。幅は4.5cmで、下端部が斜めになっており、13孔で孔の位置は1、2の小札と同じであり、威し方法も同様であろう。7～8の小札は全長8.4cm、幅5cm、孔数は14孔(7)と18孔(8)である。8の左側に並んだ9孔は縁縫いの孔であろう。9～11の小札も馬甲と思われる。これらの小札に漆などの塗料が塗られていたかどうかについての記述はみられない。

2. 喇嘛洞 I M17号墓

喇嘛洞墳墓群は、朝陽市から北東約20km離れた南八家郷四家板村にある。大凌河北岸の黄土台地の南側斜面(標高143～171m)に東西方向に分布し、数100基に及ぶ墓群である。墓域は、雨水などによって形成された侵食溝で東西に分断されている。墓地の近くにラマ教寺院と石窟があるためにこの名称がつけられた。数次にわたる発掘調査が行われている(遼寧省

文物考古研究所2004)。

墓の規模は大・中・小様々であるが、竪穴は2重墓坑で長方形の1段目墓坑をまず掘り、さらに木棺を収める2段目墓坑を掘り下げ、葬法は仰臥伸展葬である。ほとんどの副葬品は木棺内に納め、墓坑を埋め戻す際にも土器を入れている。大型墓の副葬品は豊富で、金製冠飾・金製步搖付耳飾・簪・金管・帯金具を身に付け、土器・吊輪付鉄容器・漆器を頭部に置いている。武器は被葬者の両側に、青銅容器は腹部の下、馬具・武具・工具は脚部に置いている。非常に接近している墓があるが、2基一組の夫婦葬の可能性が高い。墳丘の有無はわからないが、地上には木柱などの目印があったと見て良い。

1996年に調査された喇嘛洞IM17号墓は大型竪穴墓で、全長5.7m、幅4m、深さ2.7mの規模で、中原製青銅容器、金銅製馬具などを副葬し、被葬者の足元に馬具・蒙古鉢冑(鋌留)・挂甲・唐犁などと共に馬冑(鋌留)を置いていた。

馬冑

埋土ごと取り上げた状態のものを観察することができた³。馬冑は、全長約60cm(鼻先から底部まで)で、鉄板の厚さ0.1~0.2cm、眉間板の幅約9cm、側板の幅約5cmであるが、十二台郷磚廠88M1号墓馬冑と同様の底部を同時に作る技法で、底部の下で直角に近く折り曲げており、鋌間隔は約4~5cmを測る。鼻先の高さは約9cmで余り膨らまない。88M1号墓馬冑と同様に、幅1.5cmの鉄板を覆輪として側板後方0.6cmまで巻いている。鼻先の半円形蓋は確認できなかったが、まだ埋もれている可能性がある。面覆い部後方の横断面は台形になると思われる。

底部の高さ約17cm、底部中央の立飾りは高さ8cmで、88M1号墓馬冑の宝珠形立ち飾りとは異なり宝珠がやや尖っており、約1cmの柄が付いて前方へ傾斜させている。底部と立ち飾りを足すと約25cmとなる。底部周縁の鉄板幅は2.5~3.6cmで、88M1号墓馬冑と同じく最後に鋌留めしている。鋌は鋌頭の直径が約0.4cmと十二台郷磚廠88M1号墓馬冑よりやや小さい。肉眼で見る限り漆などは塗られておらず、内側も布地などの痕跡はなかった。頬当、馬甲は確認できなかった。製作技法からみると十二台郷磚廠88M1号墓馬冑と極めて似ていることから、時期差はほとんどないものと思われる。

3. 朝陽市域出土の馬冑・馬甲の年代

前燕は遼河⁴を国境線に高句麗と接する。遼東・遼西の支配権を巡り一進一退の戦いを繰り返す。高句麗故国原王12年、すなわち咸康8年(342)、前燕に高句麗の国都丸都(輯安)を攻め落とされ、王母と男女5万人余が連行された。そして父王の美川王陵が発かれ遺骸を持ち去られた。辛うじて逃れた王は343年、燕に王弟を使者として送り臣礼を取った上に貢物を献じた。王は燕の官号を受けた。高句麗と前燕は抗争を繰り返しながら、安岳3号墳(冬寿墓)のように永和13年(357)墨書年号を持つ被葬者(前燕の司馬、冬寿)を政治的な亡命者とし

て受け入れている。この安岳3号墳の壁画は、馬冑・馬甲を着用した馬に乗る重装騎兵が描かれていることで知られる。両国間の対立の中から軍装備の伝播(田立坤・張克拳1997)があつて当然である。十二台郷磚廠88 M1号墓についても前燕代とされている(田立坤・張克拳1997)。馬冑と馬甲を見る限り、時期差は余り無いように思われる。前燕は、鮮卑族と漢人の文化が入り混じっており、喇嘛洞 I M17号墓では中原製の龍頭柄付き銅魁が出土し、喇嘛洞 II M28号墳からは中原・南朝製の褐釉羊尊が出土している(遼寧省文物考古研究所2002)。後に薊(北京市西南部)に都を移し河北に進出、更に357年、鄴(河北省)に遷都する。東晋とは短期間ながら淮水を大体の国境線として接している。北方民族・漢人文化が混在する上、遼西・河北・中原を頻繁に移動し、鮮卑慕容部は何度も分裂を繰り返し、短命な王朝を立てているのと、前燕を含む三燕古墳出土遺物の年代決定は、紀年銘・印章を有する墓が数例しかないため難しいが、十二台郷磚廠88M1号墓と喇嘛洞 I M17号墓の年代は、中原製青銅器・陶器・馬冑・馬甲・馬具などからすると、前燕滅亡(370年)前後にあたる4世紀後半～末ではないかと考えられる。

II 中国吉林省集安市出土の馬冑・馬甲

安岳3号墳(冬寿墓)、徳興里壁画古墳、集安三室塚などの多くの高句麗壁画古墳には騎馬人物像が描かれている。そして馬冑・馬甲を着用させた馬に蒙古鉢冑と挂甲に身を固め、長槍帯剣した部隊が行進または戦闘する有様は知られてはいたが、甲冑の出土例は少なく、馬冑・馬甲についての資料は皆無であった。しかし近年、『集安高句麗王陵』が刊行され、類例が判明した。集安市は鴨緑江北岸に位置し、高句麗の国都として丸都城、国内城、好太王碑の他にも多数の古墳が存在する。しかし、古墳のほとんどは盗掘の被害を受けて墳丘・石室とも崩れて、墳形と規模が辛うじて判るものが多い。出土遺物は少なく断片化したものも多い。今回報告された古墳も全て盗掘墳である。

1. 禹山992号墓

禹山南麓に続く丘陵に立地し太王陵の西方約1kmに位置する。低地を見晴らすように造られた方形階段築成の大型積石塚で、基底部分、各段は粗く加工した大切り石を積み、墳丘は川原石で形成する。5～6段築成であったと見られ、墳頂部には各種の瓦が散乱する。基底部分は一辺36m、残存高7.5mで、南方に開口する石室は盗掘により全壊している。

「□戊戌年造瓦□□」(338年比定)「己丑年造瓦□□」(329年比定)とある紀年銘瓦が採集されている。墓の東西に祭祀台があり粗い切り石を積み上げ南北方向に造られている。東祭祀台は全長33.2m、幅6～8m、残存高1mを測る。墳墓形式・石室・瓦当の形態から中国の研究者は、371年の百済との戦いで戦死した故国原王陵の可能性が高いとしている⁵。

馬冑(図2-1-7)

馬冑と言えるのは、2と7である。1・3・4・5については頬当と考えたが、見当がつかなかった。2は馬冑の面覆い部後部の可能性が考えられる。最大幅17~18cm、鉄板厚さ0.1cm前後、3個残る鋌頭の直径は0.3~0.4cmである。上部端が斜めに折り曲げられ、その端部に鋌が2個残り、左端部にも1個が残る。この端部は斜線を描いている。7と同一個体かどうかは明らかでない。7は底部で、最大幅25cm、現存高14cm、底部は3枚の鉄板で構成するが、中央の1枚しか残っていない。鉄板の厚さは0.1cm前後である。底部鉄板の下端部は、半円状に切り透かし、下端を1cm以上直角に前方に折り曲げている。面覆い部の眉間板後端を径約10cm半円状に切って、底部後面に折り曲げて当て、底部表側から鋌を9個打っている。面覆い部と底部との結合法は、面覆い部を下に底部を上にして(幅1cmの前方に折り曲げた部分)底部の表側から鋌を打っている。鋌頭直径は0.4cmであり、玉田28号墳馬冑と同様の技法である。6は蛇行状鉄器と思われる⁶。馬甲小札については出土していないようである。

2. 太王陵

禹山南麓丘陵上に位置し、東北約200mには好太王陵碑が存在する。7段の方形階段築成の大型積石塚で、墳頂部は川原石で覆っている。基底部は一辺66m、現存高14.8mを測り、基底部の各辺にはそれぞれ全長3~5mの巨大な板石を5個立て掛けている。上段5~6層目に石室内には扁平切石造りの家型石槨を設けた特異な構造である。墳丘内部より「願太王陵安如山固如岳」の銘文磚が出土している。墳丘の周囲には祭祀台を配し、広い陵園を区画する積み石築成の陵垣(塀)を造り南門がある。近年の発掘調査により「辛卯年 好太王 □造鈴 九十六」の銅鈴や金製歩搖、豪華な金銅装馬具が出土し、広開土王陵(412年没)の確実性を増すこととなった。

馬甲小札(図2-2-1~8)

掛甲小札と馬甲が入り混じって総数237枚が出土している。馬甲小札は隅丸長方形・同台形小札が出土している。高句麗古墳壁画に描かれた人体腰部以下に使用された小札もしくは馬甲小札としている。大型小札(27枚)を2型式に、小型台形小札(28枚)を3型式に分類している。大小の小札は上下端が少し湾曲しており横断面も少し外反している。小札を威した際に隙間を作らぬためである。

Aa型の長方形小札(図2-2-1)は17枚出土した。全長11.4cm、幅6.7cm、厚さ0.1cmを測る。上部両端に径約0.2cmの孔を1孔ずつと、上部と下部両端に2孔一組の孔をあける。左下部には逆三角形に0.6~0.7cmの間隔で径約0.1cmの孔を3孔あけている。下端部には上下に径0.4cmの孔を2孔あける。径0.1cmと0.2cmの孔は横綴りの孔であろう。径0.4cmの2孔一組の孔は縦の威孔であろう。

小札 2 (図 2-2-2) は最大で、全長 12.2cm、幅 6.6cm、厚さ 0.1cm を測る。上部両端に径約 0.2cm の孔を 1 孔ずつあけ、次に上部と下部両端に 2 孔一組の孔をあける。中央に約 0.8cm の孔と下端中程上に径 0.4cm、下に径 0.3cm の孔をあける。径 0.2cm の孔は横の綴孔で、0.8cm と 0.4~0.3cm の孔は縦の威孔であろう。

Ab型長方形小札(図 2-2-3・6)は 10 枚出土した。現存長 9.2cm (推定長 11cm)、幅 5cm、厚さ 0.1cm を測る。上端に径 0.2cm の孔を 3 孔と上部と下部両端に 2 孔一組の孔をあける。下端中程には径 0.2cm 孔を 2 孔一組あけている。両端の孔は横の綴孔で、上端中央の 1 孔と下端の 2 孔一組の孔は縦の威孔と思われる。

Ba型の台形小札(図 2-2-4・5)は 14 枚出土した。全長 6.9cm、下端幅 5.8cm、上端幅 5.4cm、厚さ 0.1cm を測る。上端左右に径 0.2cm の孔を 1 孔ずつ、中程左右両端に上下に径 0.2cm の孔を 2 孔あける。また中央に径 0.6cm の孔を 1 孔あけ、下端中央には上下に径 0.3~0.4cm の孔を 2 孔あけている。径 0.2cm の孔は横の綴孔で、径 0.6cm と 0.3~0.4cm の孔は縦の威孔であろう。

Bb型の台形小札(図 2-2-8)は 10 枚出土した。全長 6.9cm、下端幅 5.6cm、上端幅 5.3cm、厚さ 0.1cm を測る。上端左右に径 0.2cm の孔を 1 孔、中央両端に径 0.2cm の孔を上下に 2 孔あける。また中央に径 0.5cm の孔を 1 孔と、中央下端には上下に径 0.3cm と 0.3cm 弱の孔を 2 孔あける。径 0.2cm の孔は横の綴孔で、径 0.5cm と 0.3cm の孔は縦の威孔であろう。

Bc型長台形小札(図 2-2-7)は 4 枚出土した。全長 7.5cm、下端幅 4.8cm、上端幅 4cm、厚さ 0.1cm を測る。上端左右に径 0.2cm の孔を 1 孔、中央両端に上下に径 0.2cm の孔を 2 孔あける。また中央下端に上下に径 0.3cm の孔を 2 孔あけている。径 0.2cm の孔は横の綴孔で、中央の径 0.3cm の孔は縦の威孔であろう。

3. 麻線 2100 号墓

国内城の西南約 3km の位置にあり、鴨緑江に合流する麻線溝を見晴らす山麓台の地下に築造された方形階段築成の大型積石塚である。基底部と各段は粗く加工した大小の切石を積み重ね、墳丘は川原石で形成しており、墳頂には瓦片が散乱している。1 段目には全長 0.6~1m の大板石を立て掛けていた。7 段築成であったと思われるが現在は 4 段しか残っていない。基底部は一辺 29.6~33m、残存高さ 6m。盗掘により石室は崩壊して不明である。南側に陵垣が残り、西南 200m に建物址が残る。王陵と見られ、4 世紀末に比定されている。盗掘穴より挂甲小札と馬甲小札が混在して 263 枚が出土した。馬甲は、隅丸長方形・台形小札が出土しており、大型小札は 2 形式に分けられ、台形小札は 1 形式を小札中央に径 0.5~0.6cm の威し孔のあるものと、無いものに分類されている。大小の小札は上下端が少し湾曲しており、横断面も少し外反している。

馬甲小札(図 2-2-9~13)

Aa型の長方形小札(図 2-2-9)は 68 枚出土した。全長 9.8cm、幅 4.6cm、厚さ 0.1cm を測る。

9は上部両端に径0.2cmの孔が2孔とやや上部両端にも径0.2cmの孔を上下に2孔あけている。また中央に径0.5~0.6cmの孔を1孔と、中央下端には径0.3~0.4cmの孔を上下2孔あけている。径0.2cmの孔は横の綴孔で、中央の径0.5~0.6cmと0.3~0.4cmの孔は縦の威孔であろう。10は9の小札とほぼ同じで、中央に縦の威孔が無いだけである。

B型の小札(図2-2-11)は78枚出土した。全長7.9~8cm、下端幅4.4cm、上端幅3.8cm、厚さ0.1cmを測る。上端左右に径0.2cmの孔と上端中央に径0.4cmの孔をあけている。また中程両端に径0.2cmの孔を上下に2孔と、下端中央には径0.2cmの孔を上下に2孔あけている。径0.2cmの孔は横の綴孔で、上端中央の径0.4cmの孔と下端中央の径0.2cmの孔は縦の威孔と思われる。小札12は上端左右に径0.2cmの孔と、中程両端に径0.2cmの孔を上下に2孔あけている。小札のやや上、中央に径0.5cmの孔と下端中央に径0.4cmと0.3cmの孔を上下に2孔あけている。径0.2cmの孔は横の綴孔で、中央の径0.5cmと下端中央の径0.4cmと0.3cmの孔は縦の威孔であろう。小札13は上端左右に径0.3cmと中程両端に径0.2cmの孔を上下に2孔、また下端中央に径0.2cmと0.3cmの孔を上下に2孔あける。径0.2cmの孔は横の綴孔、径0.4cmと0.3cmの孔は縦の威孔であろう。

4. 千秋墓

麻線2100号墳の南方約600mにあり、麻線溝東岸丘陵斜面に位置し、南方の低地を見晴らすように築造されている。方形階段築成の大型積石塚で5~6段築成と思われる。現在は5段まで確認できる。墳丘は川原石を積み上げ、基底部と各段は粗く加工した大切石を積み基底部は一辺約71m、現存高約11mで、各辺に全長2~3mの巨石を立て掛けている。「千秋萬歳永固」他の銘文磚が多数出土している。南側で陵垣、祭祀殿と見られる建物址が発掘された。千秋墓は、被葬者として故国壤王(391年没)が比定されている。挂甲・馬甲小札21枚が混じって出土した。馬甲小札は、隅丸長方形で、2型式に分けられている。小札は上下端も、湾曲せず横断面も平坦である

馬甲小札(図2-2-14~16)

A型に分類される小札14は1枚出土したらしく枚数の記述はない。全長12cm、幅6.8cm、厚さ0.1cmを測る。上端左右に径0.2cmの孔を1孔ずつあけていたと思われるが、左端部が欠損して残っていない。上部両端に径0.1cmの孔を上下に2孔ずつあけていたと思われるが、左端部の欠損で全容は不明である。中央に径0.6cmの孔を1孔、左下端部に径0.1cmの孔を2孔上下あけているが右端にはない。下端中程に径0.3cmの孔を2孔上下にあけている。径0.1cmの孔が横の綴孔で、径0.6cmと0.3cmの孔が縦の威孔であろう。

Aa型に分類される小札(図2-15・16)は2枚出土しており、長方形で14の小札より細長い。残存長11.1cm、幅5cm、厚さ0.1cmを測る。上端左右に径0.2cmの孔を1孔ずつあけていたが、現状では1孔しか残っていない。上部両端には径0.1cmの孔を上下に2孔ずつと下部両

端にも径0.1cmの孔を上下に2孔ずつあけていたと思われるが、欠損部が多く1孔しか明らかでない。小札下部中央に径0.3cmの孔が1孔残っている。もとは上下に2孔あったと思われる。径0.1cmの孔は横の綴孔、径0.3cmの孔は縦の威孔であろう。

5. 集安市出土の馬冑・馬甲の年代

盗掘により、遺物が断片のため非常に判断しにくい。禹山992号墓を故国原王の墓(371年戦死)とするならば、同墓出土馬冑が示すように、この年代には優れた鍛造技術によって数多くの馬冑が製作されたと見てよいであろう。技術的に完成度の高いタイプが新羅・加耶に伝播したと思われる。

また、太王陵(好太王陵に比定、412年没)から5型式の馬甲小札が出土した。発掘調査は大型墓(王陵級)を中心に行われたが、報告された13基のなかで4基の王陵と比定される大型墓から鉄製馬冑・馬甲・挂甲が出土していることは注目される。

Ⅲ 韓国出土の馬冑・馬甲

現在までの新羅・加耶諸国内の出土例としては、馬冑が16例と馬甲が8例で、出土古墳は洛東江下流域の両岸に集中する。高句麗と抗争を繰り返した百済での出土例が見られない点が特徴である。

1. 皇南洞109号墳

慶州市南部に分布する皇南洞古墳群中の中小古墳で、1934年に調査が行われた(齊藤忠1937)。墳丘径は13mを測り、上下2層に4基の内部主体が営まれており、下部の第4木槨の出土品中に馬冑・馬甲があったが、それらは頸甲・挂甲とされている。この古墳の年代は遅くとも5世初めと考えられ、新羅・加耶での先行例となる⁷⁾。

馬冑(図3-1)

残存部が少ないが、鼻先・眼孔部・頬当ての一部には鉸具が1個残っていた。眼孔部が面覆い部に作られ、頬当も1枚鉄板で製作された大谷馬冑形式である⁸⁾。

馬甲(図3-2)

長方形と台形の大小8～9種類の小札があり、厚さは0.1～0.2cmと推定される。2の小札中央には縦の威孔と思われる2孔一組の孔があげられている。4の小札は140枚、1の小札は100枚出土したと報告されている。

2. 舍羅里65号墳

慶州市西北部山中の古墳群で中小規模の古墳で形成される。嶺南埋蔵文化財研究院が発掘

調査を実施した。2001年同院慶州事務所で見つけた⁹。

馬冑

福泉洞馬冑形式で、厚さ0.1cm程度の鉄板を9枚使い、鋌頭径0.4cmの鋌で留めている。面覆い部中央の帯金が前後2枚の鉄板で作られ、眼孔部は面覆い部と頬当にわけてつくられており、福泉洞馬冑形式をやや簡略化して製作したような形式である。

3. 福泉洞10号墳

福泉洞古墳群は釜山市の東部に位置し、李朝時代には東萊邑城が置かれていた。邑城の城壁が連なる大砲山から南南西に伸びる丘陵上に分布している。東亜大・釜山大により発掘調査が数次実施され、その都度重要な発見がなされた。

10号墳は木槨墳で、馬具・甲冑とともに馬冑が出土したが、馬甲は伴っていない。

馬冑(図3-4)

鉄板枚数が19枚と多い点の特徴である。面覆い部の眉間板は左右2枚で、眉間板2枚を結合する帯金も前後2枚で鼻先から底部まで通っている。面覆い部側板も眼孔を境に2枚に鉄板で構成されており鼻先はあまり膨らまない。眼孔部は楕円形で、面覆い部と頬当に分けて作られている。面覆い部と底部を結合する横方向の帯金も3枚の鉄板を鋌留する。本来1枚の鉄板ですむところを複雑な工程で製作している。底部の構造も複雑で、背面の管金具を入れると5枚の鉄板で構成される。底部中央の円孔は切透かし底部まで通る帯金を前面に当て、底部表側から鋌留している。大谷馬冑形式と逆の結合法である。底部両端は馬の耳を意識したように後方に曲げている。頬当は2枚の鉄板を鋌留して作られ、眼孔前の馬の食槽を受ける突起も頬当の裏側から打出している。頬当部には2個一組の鋌列が6ヶ所あり、裏に長方形金具が鋌留されている。間に革帯などを挟んで面覆い部と頬当を連結するものと、馬冑を馬頭に装着するための革帯である。この馬冑は使用鉄板枚数の多い点と、鋌留技術を駆使しながらの製作工程の複雑さにある。馬冑を初めて製作する工人が「見本」を見ながら製作したような印象を受ける。

同古墳群では34～36号墳から馬甲が出土しているが、馬冑が出土していない。革製馬冑が存在したかもしれない。なお10号墳では馬甲が出土していない。革製馬甲の存在の可能性も考えられよう。

以上の他に釜山地域の主要古墳群の大半から馬冑・馬甲が出土している。大成洞1号墳馬冑は福泉洞馬冑形式で、蓮山洞8号墳と五倫台古墳馬冑は不明である。今後も出土例は増えるであろう。

4. 金海杜谷8号墳

金海北方山間地に分布する小古墳群中の木槨墳である。

馬冑(図3-3)

鼻先の部分と頬当しか残っていない(李尚律1999、李尚律／金井塚良一2000)。面覆い部中央の帯金の左右に眉間板1枚ずつ鋌留し、鼻先はやや膨らむが面覆い部の後部は角張る。眼孔部は面覆い部と頬当てに分離して作られているが、眼孔の形から見て頬当部に3分の2以上が作られている。頬当は大きく、右側は2枚の鉄板で構成されているが、左側の頬当は3枚の鉄板で構成されおり、眼孔前方に小さい長方形の鉄板を2鋌で結合している。補修した可能性がある。面覆い部と頬当を連結するための2個一組の鋌があり、馬の食槽を受けるふくらみも裏から打ち出す。福泉洞馬冑形式である。

5. 咸安馬冑塚

咸安平野中心部の末伊山古墳群の北側に存在する木槨墳である。被葬者の左右に1領分と推定される馬冑・馬甲が礫床上に配置されていた(国立昌原文化財研究所・咸安郡2002)。攪乱のため右側しか完全に残っていなかった。また馬冑は攪乱された遺物中から発見された。

馬冑

馬冑は断片となっていたが、各部分と全体の構造はほぼ判る。A片は面覆い部中央に比較的広い帯金が鼻先から底部まで通り、残存部分が約21cmあるので1枚の鉄板で作られていた可能性がある。B片は丸みがあるが鼻先であり膨らまず、横断面は角張っている。C片は頬当で、残存部分から見る限り残存長22cmで、2枚の鉄板で作られた頬当が大きいタイプである。眼孔は残っていないが、食槽を受ける膨らみが裏から打ち出されているので眼孔下半部が頬当に作られていたと思われる。底部は右端が1部分しか残っておらず、何枚の鉄板で構成されていたかわからない。底部中央には帯金の端を直角に折り曲げ、五角形にした裏側に底部鉄板を当てて3鋌で鋌留する。福泉洞馬冑形式にあたるものである。

馬甲(図4-1・2)

完全に残っていた右側馬甲は全長226～230cm、幅43～48cmを測る。各部分の小札の形式は大小により4つに分類される。小札は革紐により威されていた。馬尻・胴部部分は全長11cm、幅6.5cmの長方形小札(図4-2-9)を33～35列、5～6段に威している。四辺に2孔一組の孔があげられている。報告書では四辺にある孔で横綴りし、同時に縦に威したように記述されている。総数は180～186枚である。

馬頸部分は、全長約10cm、幅3.5cmの円頭形小札(図4-2-2)を用いて、18列14段に威している。中央に上・中・下端に1孔をあける縦の威孔であろう、両端には2孔一組の孔を4ヶ所にあけている。総数250～252枚である。縦長円形小札(図4-2-1)があり全長20～23cm、幅2.5～3cmの小札を縦1列に並べている。中央上端に1孔、下端に2孔一組の孔をあけている縦の威孔であろう、両端には2孔一組の孔を4ヶ所にあけている横綴りの孔であろう。総数は18枚である。縦長円頭小札の上に全長4.2cm、幅2.5cmの円頭形小札があり、2～3

段は残っていたが、残存状態は非常に悪い。孔数は11孔と記述されている。各部分の小札には布跡が残っており、馬甲の裏地と思われる。馬に装着するためものと思われる鉸具は左右5ヶ所に残っていた。

6. 陝川玉田28・M3・M1・23・35号墳

玉田古墳群からは採集品も含めて馬冑が6点、馬甲が2点出土しており、韓国内での最多出土例となっている。23・28・35号墳が木槨墳、M1・M3号墳が竪穴式石槨墳である。

28号墳馬冑(図4-3)

鉄板枚数は8枚で、眉間板は1枚の鉄板で鼻先から庇部まで通り、鼻先は膨らまず、眼孔部もあまり高く突き出していない。眼孔部前の馬の食槽を受けるふくらみは裏側から打ち出されており、面覆い部側板は1枚の鉄板である。庇部は3枚の鉄板で構成され、庇部中央の円孔は切透かしてある。眉間板後部が半円状に折り返されて庇部の裏側から塞いでおり、鉸は表側から打っている。庇部背面には管金具は無く、腐食して欠落しているのかも知れないが、当初から無かった可能性もある。面覆い部と庇部の結合法は、庇部の下端部が前方に折り返され、面覆い部を下に庇部を上にして鉸を庇部表側から打ち結合する。

頬当は1枚の半円形鉄板で作られ表側から2個一組の鉸を3ヶ所に打っている。裏側にある長方形鉄板は、間に革紐を挟み面覆い部と連結したものである。頬当下半部の鉸は、馬頭に馬冑を装着するための革帯を固定したものである。大谷馬冑形式である。

この馬冑は、一見すると大谷古墳馬冑と似ているが、以下に記すように、主な相違点が4点ある。1. 眉間板が1枚である。2. 面覆い部と庇部の結合法が大谷古墳馬冑とは上下逆になる。3. 面覆い部の外形と横断面が角張って鍛造技術が異なる可能性がある。4. 鉸が小型である。

28号墳馬甲(図4-4)

28号墳より出土した馬甲小札は、A～Eまでの5種類に分けられ、さらにE類を1～3に分類している(慶尚大學校博物館1997)。小札は革紐で威されていた。A類(1～4)は長方形小札で全長約13.7cm、幅7～7.7cm、厚さ約0.2cmで、一端に幅約1cmの革覆輪が綴じ付けられている。革覆輪のある方が下端部である。左右上端には縦に2孔一組の孔を2ヶ所あけ、下端には孔を1ヶ所あけ、覆輪用の孔は5ヶ所あけている。左右上端には2孔が縦の威孔で、次の2孔と下の1孔で小札を横綴りしている。B類(5)は、隅丸長方形で丸いほうが下端と思われる。小札上端中央に2孔一組の孔がある、小札中央に1孔あけ、小札下端に2孔一組の孔がある。小札両端に上下に2孔一組の孔を3ヶ所あけている横綴りの孔であろう。C類は隅丸長方形で断片のためよくわからない。D類は隅丸長方形で上端中央に上下に2孔一組の孔がつけられている縦の威し孔である。上方両端に上下に2孔一組の孔をあけ、やや下方両端には1ずつに孔がある。横の威孔であろう。

M3号墳A馬冑(図5-1)

2点の馬冑が出土している。A馬冑は鉄板枚数が8枚以上で、頬当は出土していないが、本来存在したことは、面覆い部側板に2孔一組の鋲が2ヶ所あって、それに対応する位置に長方形鉄板が2枚あることで分かる。面覆い部は6枚の鉄板で構成され、眉間板は1枚の鉄板で鼻先まで通りあまり広がらない。眼孔前部の横断面は丸みのある台形を呈する。側板は両方とも眼孔下部で前後2枚に分かれて3鋲で縦方向に留めている。眼孔は楕円形だが上部のふくらみ(眉上弓)を受ける突起は無く、後部の眉間板と側板を裏側から打ち出してふくらませている。底部は3枚の鉄板で構成されているが、底部中央の円孔は切透かしておらず、13個の鋲を表側から打ち付けて形だけの処置をしている。面覆い部と底部の結合方法は底部下端を約1cm前面に折り曲げて面覆い部の表面上に重ね、表面より鋲留している。底部両端の鉄板は軽く前に1段折り曲げられる。こうした特徴は他の馬冑には見られない。底部背面には管金具が上下に2つ付けられている。この馬冑は大谷馬冑形式である。

M3号墳B馬冑(図5-2)

鉄板枚数は7枚で、鼻先部の無い異様な構造である。面覆い部は眉間板1枚と側板2枚で構成され、製作当初からこの形態であったとされている。側板先端部はやや斜めになっており端部の折返しも確認できない。側板後部に半円形の鉄板が3鋲で留めてあり、馬冑を馬に着装する革帯を間に挟み鋲留めしたものである。

眼孔は楕円形で、眉上弓を受ける突起はなく、眉間板と側板を裏側から打ち出しふくらませている。後側も同様にしている。底部は大小2枚の鉄板を7鋲で留めて継ぎ足した調和のとれていない製作技法である。面覆い部と底部の結合法は、底部下端を約1cm前方に折り曲げ面覆い部に鋲留している。底部背面には管金具を鋲留する。

頬当は半円形の鉄板で作られている。半円形鉄板が3枚あり、それぞれ3鋲で留めてある。2点の上端のものは面覆い部との連結用で、下端部の1点は鉸具が付き革帯を固定していたのだろう。この馬冑は防具としては馬の鼻先を覆えない特異な形態をしている。面覆い部の眉間板の形態から見れば大谷馬冑形式の変形とも言えよう。

M1号墳馬冑(図5-3)

鉄板枚数は13枚で、面覆い部中央の帯金が鼻先まで通っている。面覆い部は縦・横断面ともに平坦で鼻先も直線的で馬の頭の特徴を把握していないようにも見える。底部は2枚の鉄板で構成され、底部背面の管金具は無い。頬当は2枚の鉄板で構成されるが、頬当の後部に扇形(?)の鉄板が鋲留めされている。これを頬当の一部と見るならば使用枚数は3枚となる。この馬冑の製作技法の特徴は福泉洞10号墳馬冑を簡略化しているような点と、鋲頭の径0.4cmと0.6cmのものを使用していることである。福泉洞馬冑形式としておく。

M1号墳馬甲(図5-4)

馬甲は折り畳まれて置かれていた。盗掘により一部攪乱されていたため正確な数量は不明

であるが、長方形と台形小札の大小2種類あり革紐で威されていた(慶尚大學校博物館1992)。長方形小札が多数を占めている。長方形小札(図5-4-1~6)は、全長約11cm、幅約7.5cm、厚さ約0.1cmを測る。上端に孔を5ヶ所あけ、横に威している。左右両端に2孔一組の孔を上下に3ヶ所あけている。横綴りの孔である。台形小札(図5-4-7・8)は、全長7.5cm、幅7.5cm、厚さ0.1cmで、上端に2孔一組の孔をあけており横の綴孔があり、4ヶ所あるものもみられる。小札左右両端には上下に2孔一組の孔を上下に2ヶ所あけている。横の綴孔である。

23号墳馬冑(図6-1)

この馬冑は盗掘によって断片となっているが、鉄板枚数は8~10枚で構成されていたと思われる。面覆い部は3枚の鉄板で作られ、中央は1枚であるが、側板は左側板が前後2枚になり、眼孔部の下で鉸留しているため、右側側板も前後2枚で製作されていたと考えられる。底部は3枚の鉄板で構成される。底部と面覆い部の結合は、底部と面覆い部を直角に付け、底部下部と面覆い部上面に断面L字型の鉄板を当てて、双方に鉸を打っている。底部背面下部に長方形鉄板が重ねられているが鉸留なのかは不明である。頬当も半分しか残っておらず、方形鉄板を鉸留して細い鉄棒を通して面覆い部と連結していたようだが面覆い部分が残っていない。頬当下部に馬冑を着装するための半円形鉄板を3鉸で留めている。この馬冑は大谷馬冑形式である。

35号墳馬冑(図6-2)

断片だが全体の形態を把握することができる。鉄板枚数は11~12枚で構成され、面覆い部は縦・横断面とも直線に近い。中央の帯金は前後2枚の鉄板を鉸留し、左右の側板は残りが悪いが、おそらく1枚ずつであろう。面覆い部と底部の結合法は左右側板を帯金に折り曲げ、底部は3枚の鉄板を横方向に鉸留めしている。底部の背面下部には管金具を鉸留めする。頬当は2枚の鉄板で眼孔は半分以上が頬当に作られ、眼孔の前後には馬の食槽を受けるふくらみを作っている。面覆い部と頬当の結合法は3個の長方形鉄板を鉸留で連結し、頬当後部には鉸具を鉸留めしている。この馬冑は、福泉洞馬冑と玉田M1号墳馬冑の中間のような形態を呈しているが、福泉洞馬冑形式である。

7. 陝川礪溪堤カA号墳

竪穴式石室より馬具、冠帽付冑などともに出土した。伊藤秋雄氏は、その中の用途不明鉄器5点を革と鉄を合成した馬冑と判定された(図6-3)。鼻先と眼孔部に鉄板製の部分品を合成して製作されたと考察し、同時に革製馬甲の存在についても指摘されている(伊藤秋雄1994)。

8. 韓国出土の馬冑・馬甲の年代

新羅は、中原高句麗碑によっても知られるように、5世紀初めには高句麗と同盟関係にあ

った。新羅領内に駐屯した高句麗軍司令官すら居た。こうした関係から高句麗の武器や甲冑が早く取り入れられたと考えられる。皇南洞109号墳(4世紀末～5世紀初め)出土の馬冑・馬甲(図3-1)は高句麗製(伊藤秋雄 1993)であろうが、鉄生産が盛んな新羅でも模倣が始まり、舎羅里65号墳馬冑(5世紀初頭)が出現したと考えられる。5世紀中頃には洛東江東岸域に新羅の勢力が及ぶにつれて福泉洞馬冑形式が各地に広がり、大谷馬冑形式も模倣された可能性は高い。洛東江東岸・西岸に分立した加耶諸国では鉄生産が盛んであり、各地域の技術者集団が武器・甲冑を生産していたとみられる。新羅を経由して移入された馬冑・馬甲の模倣が行われていた(李尚律 1999)と考えられる。

西岸域諸国で馬冑6点・馬甲2点の最多出土例を誇る玉田古墳群では、28号墳(5世紀後半)から大谷馬冑形式(図7-1)が出土し、M1号墳(5世紀後半)から福泉洞馬冑形式が出土した。高句麗から直接、馬冑・馬甲・挂甲が入ってきたとは考えられないので、新羅・洛東江域諸国を通じて馬冑・馬甲・挂甲がもたらされたのであろう。

玉田28号墳馬冑(図4-3)は、面覆い部が鉄板3枚、庇部が鉄板3枚で構成される。面覆い部と庇部の結合法は、面覆い部で眉間板を半円形に切って背面に当て、庇部中央鉄板に切透かした半円孔を当て、庇部下部を前に折り返して眉間板を上置き、庇部の表側から鉤を打って結合している。鉤頭径が0.3cmと小さい。禹山992号墳(4世紀後半頃)馬冑庇部(図2-1)は、3枚の鉄板で構成され面覆い部と庇部の結合法は同じである。鉤は0.4～0.5cmと大きい。禹山992号墳との年代差が問題である。玉田23号墳(5世紀前半)馬冑は残存部が少なく他の馬冑との比較は難しい。庇部は3枚の鉄板で構成されるが、庇部と面覆い部の結合法は、禹山992号墳馬冑と異なる。高句麗製の可能性が高いが、高句麗製とは断定できない。大谷馬冑形式・馬甲全てが高句麗からの移入品とは思われず、多羅国でも製作されたであろう。大谷馬冑形式の変形のような玉田M3号墳馬冑B、福泉洞馬冑形式を簡略化した玉田M1号墳馬冑などが、これに当たるのではないだろうか。

5世紀初め、高句麗軍の南下により広まった馬冑・馬甲・挂甲を着用した騎兵がどの程度編成されていたであろうか。慶尚南北道の地形は、山脈・河川・小平野が複雑に入り組む、加えて大河洛東江が南北に縦断している。主に山城を中心に攻防戦を繰り返した地域に有効な武装具であったろうか。現在の所、ほとんどの馬冑・馬甲の出土例は5世紀に限られる。一時、新羅・加耶諸国に流入・生産された馬冑・馬甲が有効な武装具でなくなって行ったのではないか。5世紀中頃に、新羅は洛東江東岸地域の大部分を支配した。それまで西岸域の加耶諸国は百濟を主として倭国とも通好し、高句麗の南下や新羅の侵攻に対抗した。新羅の勢力が洛東江西岸に及ぶのは6世紀前半を過ぎてからであり、532年に金官加耶が、560年には大加耶が新羅に服属する。抗争の激化により山城を中心にした攻防戦が中心になり戦闘法が変化し、生産されなくなったと考えてみた。

武器・武具は戦闘方法の変化から新形式が急速に普及した後、改良され材質・形式が変化

していく。武器・武具の模倣も盛んに行われる。高句麗の馬冑・馬甲・挂甲もこのような経過をたどって製作されなくなったと思われる。

IV 日本出土の馬冑・馬甲

和歌山県大谷古墳の発掘調査により出土した馬冑・馬甲・馬具は、中国・高句麗につながることは当初から判明していたが、長年、唯一の出土例であったために研究は進まなかった。埼玉県將軍山古墳馬冑の出現と滋賀県甲山古墳からの馬甲の出土により、その伝来も時期差があることがわかってきた。我が国古墳時代においては極めて特異な遺物である。

1. 大谷古墳

和歌山県和歌山市大谷の紀ノ川を望む標高約50mの丘陵尾根の突端に築造された前方後円墳(5世紀末～6世紀初頭)で、1957年に実施された発掘調査で、阿蘇山溶結凝灰岩製の石棺(和歌山市立博物館2001)を安置した墓壙から大陸製馬具などとともに馬冑・馬甲が出土した。

馬冑(図7-1)

馬冑の鉄板枚数は11枚で、面覆い部は6枚の鉄板で構成され、巧に馬頭の特徴を表現している。鼻先は幅広く、かつ高い鼻孔部の形を高く製作したため、面覆い部の鼻梁板後部で幅が狭くなり、眼孔部後部で幅が広がっている。近年行われた保存処理により、鼻梁板後部が直線ではなく波線型に切られていたこと、側板が眼孔部下で前後に2枚になることが判明した。面覆い部端部は、全て鉄板を裏側から表側に幅0.3～0.4cm程度折り返して丸く仕上げている。眼孔は歪んだ円形で、これは馬の眼孔上部の眉上弓が突き出ているために、上部と後部を高くする必要があったのであろう。また眼孔前方は面覆い部の幅が狭いため眼孔の形が歪む。眼孔の形や馬の骨格も知った上で鍛造したと思われる。眼孔周縁も裏側から表側に幅0.5～0.6cm折り返しているが、眼孔が歪んでいるために、眼孔下部折返し部分は鉄板が縦に切れ、切れ目を斜めに寄せ込んでいる。眼孔前方には馬の食槽を受けるための「ふくらみ」から打ち出し面覆い部と庇部の結合法は、面覆い部後部を高さ1.4cmの幅で直角に折り曲げて、庇部鉄板を前に置き表側から鋳留している。庇部は3枚の鉄板で構成されるが、庇部中央の高さ4.3cmの円孔は面覆い部から折り返して半円形に切って、庇部では半円形の形に合わせて切っている。構造上必要は無いだろうが、庇部の強度を補強するための処置と考えられる。頬当は半円形の1枚鉄板で、弧状の周縁には1.7cm間隔で小孔がつけられている。裏地か覆輪を縫い付けるための小孔である。頬当裏側の3ヶ所に革紐のようなものを挟み、小鉄板を2個一組で鋳留している。これは面覆い部内側にも見られ面覆い部と頬当を連結する。庇部背面の官金具は房飾りか、小旗を差し込むものである。敵・味方が同様の武装をしていた場合に、相手を識別するために着けたのだろう。大谷馬冑の鍛造技術からうかがえること

は、馬頭の特徴を巧に表現しながら、その特徴をかなり誇張して表現する。各鉄板の大きさも合理的に割り出されている。

馬甲(図7-2・3)

馬甲は折り畳まれて副葬されていた。大小2種類の鉄製小札が約450枚以上出土している。長方形大型小札は厚さ0.1cm未満で全長11cm、幅7cmを測る。小札周縁は少し折り返され、やや表側に反っている。左右両端に2孔一組の孔を上下に2ヶ所あけ、少し離れて1孔がある。また2孔一組の孔を上下にあけ、上端には孔がなく、下端に5孔があげられている。左右両端の2孔一組、3ヶ所の孔で小札を横綴りし、残る1孔で縦に威していく。下端部の5孔は横斜めに縁縫いする。最下段の小札は幅広の革を下端に挟み、横縫いに表裏交互に革紐を通して。大型小札は4段と5段に威されていた。台形小札は、厚さ0.1cm未満で、全長8cm、上幅6cmを測る。やや表側に反っている。左右両端に2孔一組の孔が上下に2ヶ所あり、少し離れて1孔がある。上端には孔がなく、下端に4孔をあけ、革紐を斜めに縁縫いしている。下端部中程の両端2孔で小札を横綴りし、小札左右上端の2孔で縦に威していく。台形小札は20段程度に威されていたが、2部分に分かれる可能性がある。大型小札が胴部用、台形小札が馬首と尻部の2部分に分かれると思われる。

2. 将軍山古墳

馬冑は、埼玉県行田市埼玉古墳群中の前方後円墳である将軍山古墳(6世紀後半)の横穴式石室から挂甲などとともに出土した(若松良一1991)。

馬冑(図7-4)

不時発見のため面覆い部の約25%しか残っていない。馬甲は発見されていない。馬冑の鉄板使用枚数は推定で17~19枚と思われる。

面覆い部は6枚以上の鉄板で構成され、面覆い部後部右側右眼孔部、左眼孔部前方部を結合している。福泉洞10号墳馬冑のように面覆い部中央の鼻先から底部まで通っている帯金は推定で幅約7cmと広く、側板の枚数は1枚もしくは2枚かは不明である。面覆い部と底部を結合する横方向の帯金も幅広い。この部分は鉄板3枚を長い鋌足の鋌で留めており技術的には優れている。面覆い部端部は裏側から約0.3cmの幅で折り返されている。眼孔部は眉間板と側板に分けて作られ、眼孔はゆがんだ円形で、裏側から表側に約0.3cm折り返している。眼孔前方には、食槽のふくらみを受ける楕円形のふくらみが裏側から打ち出されている。この下端に3個一組の鋌が3組あったと思われる。この側板の鋌列位置に対応する内側に長方形鉄板があり、革紐などを挟み頬当と連結していた。頬当は現存していないが、図の大きさでよいだろう。将軍山古墳馬冑は福泉洞馬冑形式に入るが、相違点も多い。福泉洞馬冑形式は眼孔を面覆い部と頬当に分けて作り、側板は前後2枚となる。面覆い部中央の帯金が幅0.3cmと狭い。将軍山古墳馬冑は眼孔が眉間板と側板に作られているが、残存部が少ないた

め側板が前後2枚であったのかは不明である。面覆い部中央の帯金は鼻先で幅が狭く、底部は約7cmと広くなる。断片であるが咸安馬甲塚馬冑帯金の幅5cmに近い。

3. 甲山古墳

滋賀県野洲町小篠原の丘陵端に位置した径約40mの円墳(6世紀後半)で、横穴式石室には蓋の前後短辺に各1、左右長辺に各2個の縄掛突起をもつ阿蘇山溶結凝灰岩製の石棺が安置されている(野洲町教育委員会2001)。遺物は盗掘を受けて断片が残されているだけである。

馬甲(図7-5)

円頭形小札が最大で、幅9.9cm、厚さ0.5cm、残存長13.5cmを測る。上部の左右両端に上下に2孔一組の孔をあげ、下部には1孔みられる。他の小札は隅丸方形か長方形小札であるが断片である。

4. 日本出土の馬冑・馬甲の年代

日本に伝来した馬冑・馬甲は3例と少ない。大谷古墳は、瀬戸内海東端の紀ノ川河口を見下ろす位置にある。「紀氏」が築造した古墳と指摘されており(岸俊男1966、藺田香融1970)、大陸・朝鮮半島製馬具・装身具を一括入手していた。一方、甲山古墳は、内陸部にあり年代は下がるが大谷古墳と同様の副葬品を有している。さらに両古墳からは九州で製作された石棺が用いられており、被葬者が大和王権の軍事体制下に組織され、河川・海上交通に従事していたことを物語っている。

大谷古墳出土馬冑と馬甲の伝来経路は、同時に副葬された華麗な馬具も考慮するならば、高句麗——百濟——倭または、高句麗——倭の経路といった可能性も考えられる。將軍山古墳馬冑については加耶諸国——倭と考えている。甲山古墳馬甲に関しては、断片で資料が少なく伝来経路の判定ができない。

日本に伝来してきた馬冑・馬甲は、実用されることはなく、首長達の儀式に威儀具として使用されたと考えられる。大谷古墳では短い伝世期間で副葬され、將軍山古墳では半世紀程度伝世した後に副葬(若松良一1991)されている。

V 中国・韓国・日本出土の馬冑・馬甲の年代と製作技術

朝陽市十二台郷磚廠88M1号墓・喇嘛洞 I M17号墓馬冑と韓国・日本で出土した馬冑との相違点は次の4点である。

1. 面覆い部と底部が一体で、5枚の鉄板で構成され、韓国・日本で出土した全体構造の判明した馬冑は、面覆い部と底部が別々に作られている。十二台郷磚廠88M1号墓馬冑は、眉間板1枚・側板4枚の計5枚の鉄板を底部まで通し、面覆い部と底部の境目で直

角に近くに曲げられている。この構造は、喇嘛洞 I M17号墓馬冑と同様で 2 例しかない。

2. 鼻先部に取り付けられた開閉自在の半円形鉄板は、馬の鼻先を防護するためのものだが、これも従来知られていない。
3. 底部の宝珠形飾りの高さが 6 cm、幅 7.4 cm である点も、今までの馬冑にはみられなかった。従来の馬冑では底部裏側に小さな管金具(取り付けられていない馬冑もある)が鋌留めされており、これに房飾りや小旗を挿し、敵味方を区別したようだ。
4. 面覆い部と頬当てを連結するのに両者に小鉄板を 2 個ずつ折り曲げて細い鉄棒を通し鋌留して、両者を連結している。蝶番の一種のように見える(図 1-3)。

一方、韓国と日本の馬冑の共通点は次のようになる。

1. 面覆い部の眉間板が幅広い(玉田 35号墳・咸安馬冑塚・將軍山古墳)。
2. 頬当が大きく、眼孔部が面覆い部と頬当に分離して作られる(福泉洞 10号墳・玉田 M1号墳)。

馬冑鍛造技法は生硬さを感じさせるものの、鉄板使用枚数と鋌留製作技法は合理的で、面覆い部と底部を同時に製作する技法は、量産する場合には便利な方法で、これまで知られなかったものである。眉間板が大きく眼孔部が面覆い部と頬当てに分離して製作される点、頬当が大きい点などは、福泉洞 10号墳馬冑・將軍山古墳馬冑などの祖形(田立坤・張克拳 1997)と見てよいだろうが、底部の宝珠飾り、鼻先の開閉板、面覆い部と頬当の連結方法は異なる。出土例から見る限り、朝鮮半島南部から出土する馬冑と直接つながらないと思われる。

馬冑小札は、円頭長方形・円頭長方形下端部斜め・隅丸長方形・隅丸三角形小札があり、高句麗古墳出土小札の隅丸長方形・隅丸台形小札と形式が違う。やはり中間には高句麗の存在(田立坤・張克拳 1997)があり、百濟は別としても新羅・加耶諸国が前燕と交渉があったとは考えられないだろう。

一方、高句麗で初めての出土例となった禹山 992号墓馬冑の底部は、玉田 28号墳馬冑と同じ製作技法で、底部と面覆い部の結合法も同じである。大谷古墳馬冑とは底部形式や円孔は同様の技法だが、大谷古墳馬冑の底部と面覆い部の結合法は面覆い部鉄板を底部背面に折り曲げて当て底部表側から鋌を打っており、この点が異なる。

新羅・加耶諸国から出土する馬冑を、大谷馬冑形式と福泉洞馬冑形式(新羅・加耶諸国で模倣された)の 2 形式に分け、大谷馬冑形式を中国・高句麗製とする解釈であったが、1 例とはいえ、大谷古墳馬冑と同形式の馬冑が高句麗から出土したことから、大谷古墳馬冑は高句麗製と見て良いであろう。

高句麗製馬冑小札の多くは、小札中央に 1 孔、下端部中央に 2 孔がある。玉田 28号墳馬冑小札(図 4-4)は、小札中央に 1 孔が、上端部に 2 孔がある。しかし、大谷古墳馬冑小札は、集安市高句麗墓馬冑小札の大部分のように小札中央に縦の威孔はなく、この点が異なる。高句麗の馬冑も、一定の基準はあったにしても一形式のみで生産していないと思われる。

皇南洞 109号墳馬冑・馬冑(図 3-1・2)は、年代が最も早い。その形式から見て高句麗製で

あろう。小札(図3-2-2)は、中央に2孔と同下端に2孔が上下にある。

禹山992号墓馬冑は底部が3枚の鉄板で構成され、鋌は0.4~0.5cmと大きい。面覆い部と底部の結合法は、面覆い部眉間板を半円形に切り、底部背面に直角に折り曲げて底部に切透かした半円孔に当て、底部下部を前に折り返して眉間板の上に置き、底部表側から鋌を打ち結合している。玉田28号墳馬冑と、面覆い部と底部の結合法は同じである。玉田28号墳馬冑(図4-3)と、禹山992号墳馬冑のかなりの年代差が問題である

玉田28号墳馬冑(図4-3)は面覆い部が鉄板3枚、底部が鉄板3枚で構成される。面覆い部と底部の結合法は、面覆い部眉間板を半円形に切り底部背面に当て、底部中央鉄板に切透かした半円孔に当て、底部下部を前に折り返し眉間板を上置き、底部表側から鋌を打って結合している。鋌頭径は0.3cmと小さい。

玉田28号墳馬冑は大谷馬冑と一見して似ているが、主な相違点が5ヶ所ある。①眉間板が1枚である。②面覆い部と底部の結合法が大谷古墳出土馬冑と上下逆になる。③面覆い部の外形・横断面が角張って鍛造技術も違う可能性がある。④鋌が小型である。⑤底部の管金具がない。

玉田23号墳馬冑は残存部が少なく、他の馬冑との比較は難しい。底部は3枚の鉄板で構成されるが 底部と面覆い部の接合法が禹山992号墓馬冑と異なる。玉田古墳群のなかでは年代の早い馬冑で高句麗製の可能性もある。

玉田M1号墳馬甲(図5-4)は長方形と台形小札それぞれに大小2種類あり、大谷古墳馬甲に長方形と台形の小札に大小2種類があるのと同じで、長方形小札の孔数は同数ではないが、小札の一端に5孔あけられ、革紐で横綴じされた方を小札の下端とすれば、威し法は大谷古墳馬甲と似ている。玉田M1号墳の台形小札の孔数は10孔、大谷古墳馬甲台形小札の威孔数は12孔で孔数は異なる。玉田28号墳馬甲小札A類(図4-4-1~4)は長方形で、下端部の革覆輪の孔数は5孔で大谷古墳馬甲長方形小札(図7-2)と同じであるが、両端の孔数が、A類は5孔であるのに対して、大谷古墳馬甲長方形小札は7孔であることから威し法は違うようである。

馬冑が実際に使用されていたことは、いくつかの馬冑に修理されたと思われる個所があり、実用されていたことを物語っている。金海杜谷8号墳馬冑(図3-3)は、眼孔部前方に小長方形鉄板を2鋌で鋌留しており修理した(李尚律1999)可能性が高い。

馬甲が使用されているうちに威し紐や裏地が破損し、威し革を解き、全ての小札を取り外してから威し直すのは手間に係るため、修理して間に合わせに付け加えた小札ではないかと思われるものがあつた。小札が少数で孔が不規則にあけられているものや小札の一端に孔を多くあけられているものがみられる。1領の馬甲であまり小札の種類が多いものが、これに該当する可能性がある。

問題点を整理すると次のようになる。

1. 韓国の馬冑は、大谷馬冑形式、福泉洞馬冑形式に大別されるが、1点ごとに鍛造技術・鉄板枚数・鉾の使用法などが異なる例が多い。一地域で上記の2タイプが並存する場合が多い。
2. 新羅では中小古墳から出土する。
3. 加耶諸国では王・首長層の武装具であったであろうが、ほとんどが主要な大古墳群から出土している。
4. 革製の馬冑・馬甲が多数存在した可能性がある。

大谷古墳馬冑底部と同様の製作技法を示すのが、禹山992号馬冑(図2-1)と玉田28号墳馬冑(図4-3)で、前者は底部の一部しか残っていないが、鉾の大きさもほぼ同様である。また玉田28号墳馬冑の面覆い部は3枚の鉄板で構成するが、鉾頭が0.3cmと小さい。

將軍山古墳馬冑は面覆い部の帯金の幅が広い。残存部が少ないので問題は残るが、咸安馬冑塚馬冑と似ている。また鉾頭径も同じ数値である。新羅・加耶諸国の一つで製作されたのであろう。

一方、馬甲については不明な点が多い。頸部・胸部・胴部・尻部によって小札の大きさが異なり、大体5～7種類の小札で構成されていたものが多い。大小2種類の小札で構成されているのは大谷古墳・玉田M1号墳馬甲である。武具の性格として防御性に優れ単純化された製作しやすいものが発達した形式といえるだろう。大谷古墳馬甲小札長方形は縁縫いのある方が下端で馬胴部用台形小札は縁縫いの無い方が下端で馬頸部・尻部用と思われる。そして台形小札は威していくと扇形に広がって行く(図7-3)。馬の頸部は上が細く下が太く、馬尻部は太い。扇形の広い方を下部にして着装したと推定した。

玉田M1号墳馬甲の小札は長方形・台形小札大小2種類で、大谷古墳馬甲の長方形・台形の小札大小2種類と同じで、長方形小札の孔数は同数ではないが、小札一端に孔が5孔あけられ革紐で横綴じされた方を小札下端とすれば、小札の威し法は大谷古墳馬甲と似ている(図5-5)。玉田M1号墳台形小札の孔数が10孔、大谷出土馬甲台形小札の威し孔数は12孔と孔数は違う。玉田28号墳馬甲小札A類(図4-4-1～4)は、長方形で、下端部革覆輪の孔数は5孔で大谷古墳長方形小札と同じだが、両端の孔数が、A類は5孔、大谷古墳長方形小札は7孔で威し法は違うと思われた。野洲甲山古墳出土馬甲は、ほとんどが断片で比較が困難であった。

おわりに

アジア最古の馬冑・馬甲は、中国湖北省隨曾侯乙墓(戦国時代前期、B.C.450年頃)より出土した漆塗り牛革製馬冑・馬甲2領(図8-1)と漆塗り革製兵士用甲冑13領である(湖北省博物館1989)¹⁰。馬冑・馬甲は牛革に黒漆を塗り彩色しており、2領あることから2頭立て馬車を引

く馬に着用させたものである。馬冑は眼孔と耳孔をあけており、馬頭に革帯などで固定したと思われる。馬甲は、馬頸部・胸部・胴部用に分かれており馬の武装具としての基本形は完成している。

戦国時代は、戦車部隊が軍隊の主力の一つとして編成されていた。軽く強靱な漆塗り牛革製の馬冑・馬甲を着用した引き馬は、弓矢と各種の武器の攻撃に耐え戦場で威力を発揮したであろう。曾侯が保有した全ての戦車の馬にこのような馬冑・馬甲が装備されていたとは、思われませんが、王・将軍が使用する戦車や、近衛兵団のような戦車部隊には使用されていたと考えられる。戦国時代B.C.589年、晋・魯・衛連合軍と齊軍は、鞍(現在の済南市南近郊)で大戦車戦を繰り広げた。この時、晋軍だけで800台の戦車部隊を動員している。齊侯は、馬に甲も着用せず、戦車に乗り先陣を駆けたと記されており、この会戦は齊軍の大敗北となった。

天下統一を果たした秦始皇帝は、強大な軍事態勢を作り上げた。その一端は始皇帝陵から発見された兵馬俑坑からうかがえる。兵馬俑坑(K9801T5G1)から出土した石製馬甲(始皇陵考古隊2001)¹¹は曾侯乙墓革製馬甲と形式は違うが革製馬甲のように思われる。その理由は、5種類ある小札の内、最大の台形小札(図8-3)で縦18cm、横幅11cmと大型である点、復元図を見る限り秦兵馬俑に見られる騎兵用の革鞍を置くことはできないと考えられ、戦車を引く引き馬用に製作された馬甲であろう。馬冑はないようである。

秦・漢時代を経て戦車は徐々に使用されなくなり、代って騎兵・歩兵が軍の主力になっていく。騎兵の発達とともに騎兵用甲冑が多様な形式で出現する。既に漢代において馬の胸部を保護する皮革製の当胸が使用されており、馬の前胸部に垂下して馬体を保護した。騎兵と歩兵が入り乱れて戦う場合(図8-4)のように、歩兵は盾などで身を守り、長柄の武器でまず馬を攻撃し、騎兵の戦闘能力を失わせる。騎兵と騎兵の戦闘の場合は、人を攻撃するのが普通である。

後漢末年には比較的完備した馬甲が出現するが、この段階ではまだ数少ない装備であったが、西晋～五胡十六国時代の大動乱期に入って漢民族・北方民族が入り乱れて戦争が続く。戦闘の激化とともに、多様な形態の鉄製・革製馬冑・馬甲は大量生産され騎兵の一般的な装備になったらしく¹²、古墳壁画や陶俑に表現されている。図9-1の馬俑は鼻先を出し馬面(面簾)・頸部・胴部・尻部の4部分で構成される。図9-2の馬俑は馬顔面の一部を覆う当盧を着け、円頭形小札(魚鱗形小札)を裏地に何段にも威した馬甲を着用している。図9-1・2の馬俑は、前・後輪が直立した鞍を置き、尻部には寄生座を立て、輪鐙を垂下する。表現された馬甲から鉄製・革製の区別はつかない。2つの馬俑に表現された馬甲は、明らかに形式の違いを示している。この墓の年代は、前秦～後秦(350年以降～410年頃)と報告されている。数多い騎馬俑などから馬冑・馬甲は、4世紀前半には成立していたと見てよいだろう。大量生産された馬冑・馬甲には様々な形式があり、それは国別・時期別により変化して行く。

戦闘による捕獲品や、他民族から購入する場合もあった。概説書(川勝義男1974)に従い三燕時代の武器・甲冑・馬具の生産体制を推定してみた。前燕は、朝陽に都を移した頃から戦火を逃れて流入した漢人を受け入れ、農業・商工業に従事させた。また中国官制を採用し支配体制を整えたが、匈奴諸民族に見られるように、軍事は宗室諸王が軍を個別に支配し、各地に広大な軍営地を持ち、「営戸」と言われる多数の支配民(農民・各種工人・商人)を「軍封」として国家から与えられ、食料・武器・甲冑・馬具・馬匹を貢納させていたと考えられている。「営戸」の内容は推測の域を出ないが、郡県制度とは関係なく「宗室的軍事体制」と名付けられている。諸王が支配する軍営を統括するのが中国官制の「大司馬」であり。前燕宗室の慕容恪や前燕滅亡時の大傅慕容評が掌握していた。この制度は北燕にも受け継がれ、北燕高官の馮素弗は「大司馬」として軍事を統括している。各地の軍営地の「営戸」により生産される馬具・甲冑・馬冑・馬甲が一形式で生産されていたとは考えられない。

各民族が採用した重装騎兵の制度は、隋・唐帝国に至って軽装騎兵が中心となり甲冑は着用するが、重装備の馬冑・馬甲は使用されなくなり宮廷儀礼制度に残っていく。唐代懿徳太子墓より出土した113体の加彩貼金鎧甲男子騎馬俑(図9-3)がそれを物語っている。騎馬俑は馬面(庇部と頬当はない)が鍍金されおり、馬の鬣部分と馬甲裾周りや鞍下部の華麗な文様は、錦織物による馬衣で、馬甲は前後2部分に分かれており、馬衣に威されていたか、取り付けられるようになっていたと考えられる。男子は、鍍銀(または銀製小札)小札の甲冑を着用している。皇帝・皇太子の行幸(王仁波1979)に当たって使用された。

小稿をまとめるにあたって、次の各機関および各氏のお世話になるとともに多くのご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して深く感謝します(敬称略)。

遼寧省文物考古研究所、韓国文化財保存学会、慶尚大學校博物館、(財)慶南考古学研究所、国立昌原文化財研究所、釜山大學校博物館、(財)嶺南文化財研究院、和歌山市立博物館、張克挙、田立坤、申敬澈、崔鐘圭、全玉年、趙榮濟、柳昌煥、朴升圭、李午熹、李尚律、李柱憲、後川恵太郎、小野山節、松本ちえみ、矢倉嘉人、山田浩史、李聖子、若松良一

註

- 1 馬冑・馬甲の編年・形式・伝来経路・年代観については、研究者間で見解の相違が多くみられた。しかし、その起源を中国に求めることは研究者の一致するところである(若松良一1991、神谷正弘1992、伊藤秋雄1993・1994、太田博之1994、巽善信1995)。
- 2 馬冑の部分名称については、中国・韓国・日本の研究者間で異同がみられることから、小稿での馬冑の説明に当たって図10で表示した。面覆い部は馬の顔面を、庇部は馬の頭部を、頬当は馬の頬を保

護する。この3部分を合成した物を馬冑とした。

- 3 1998年3月、遼寧省考古学研究所で喇嘛洞 I M17号墓出土馬冑を実見させていただいた。
- 4 遼河は遼寧省中央部を流れる大河川で、遼東・遼西をここで区分する。
- 5 吉林文物考古研究所・集安市博物館2004の「結語」。従来は紀年銘瓦だけで年代が推定されていた。
- 6 小野山節氏のご教示を得た。
- 7 伊藤秋雄1993のなかで、馬冑は高句麗製であると指摘している。
- 8 大谷馬冑形式については、神谷正弘1992でふれた。大谷馬冑形式の定義としては、
 1. 馬冑の面覆い部の鼻梁板・眉間板は1・2枚で構成される。
 2. 底部は基本的に3枚である。
 3. 眼孔部は面覆い部に作られる。頬当は一枚の鉄板で製作される。また、福泉洞馬冑形式は
 1. 面覆い部中央に帯金があり、帯金が鼻先から底部までとおり、面覆いを構成する。
 2. 底部は構成枚数が多く、製作方法が一定しない。
 3. 眼孔部は面覆い部と頬当に分離して製作される。頬当は2～数枚の鉄板で製作される。
- 9 2001年7月、嶺南文化財研究院慶州事務所で未発表資料である舎羅里古墳群出土馬冑を実見させていただくとともに、舎羅里古墳群については同研究院朴升圭氏より、種々ご教示を得た。
- 10 戦国時代の革製馬冑・馬甲は他に類例がいくつかあるが、曾侯乙墓は兵士用甲冑・武器との組み合わせが判る例である。
- 11 石製小札の石材は、青灰色石灰岩で軟質・層状に剥離する加工しやすい材質と既述されている。
- 12 楊泓1985によると、「司馬炎は曾って廬欽に『御府の人馬鎧』を送っており、当時の馬鎧がまた比較的得がたく貴いものであったことが知られる。だが十六国と南北朝のこの時期に到っては、馬鎧は軍隊中比較的普遍的な装備となり、常に百千、ときには万をもって数えられている」と記述し晋書に見える馬鎧(中国では具装と言う)の記事を引用している。また同章49頁28行目に、馬鎧の材質について「それは人鎧と同様に、鉄鎧と、皮質の2種がある。さきに述べた司馬金竜墓出土の甲騎具装備では馬具装に幅広い条文が描かれ、これは多分皮甲の様子を模擬したものと考えられる『宋書・武帝紀』『寧朔に將軍索貌を使わし鮮卑の具装の虎斑なる突馬千余匹を領せしむ。皆練五色を被る』とあるが、このような獸文をなす具装はおそらく革質のものであろう。

参考・引用文献

- 伊藤秋雄 1993「慶州皇南里109号墳出土の馬冑－馬冑の型式と系譜の問題を中心として－」『日本考古学協会第59回総会・研究発表要旨』日本考古学協会
- 伊藤秋雄 1994「韓国陝川礪溪堤カA号墳出土の革製馬冑の復元について」『日本考古学協会第60回総会・研究発表要旨』日本考古学協会
- 伊藤道治 1967「鼎の軽重を問う」貝塚茂樹編『東洋の歴史』第2巻 人物往来社
- 王仁波 1979「懿徳太子墓所表現的唐代埋葬制度」『中国考古学会第1次年会論文集』中国考古学会文物出版社
- 太田博之 1994「埼玉將軍山古墳出土馬冑資料の基礎研究」『日本考古学』第1号 日本考古学協会

- 小野山節 1959「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 平凡社
- 小野山節 1985「馬具の新資料」『増補大谷古墳』同朋舎出版 補記2・3
- 小野山節 1992「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑』第1巻 日本中央競馬会 吉川弘文館
- 神谷正弘 1992「日本・韓国出土の馬冑・馬甲」『考古学論集』第4集 考古学を学ぶ会 歴史堂書房
- 神谷正弘 1993「日本・韓国出土の馬冑・馬甲」(増補)森浩一編 馬の文化叢書『古代一埋もれた馬文化』財団法人日本馬事文化財団
- 川勝義男 1974「魏晋南北朝」『中国の歴史』第3巻第9章 異民族国家の形成 講談社
- 咸陽市文物考古研究所 2004「咸陽平陵十六国墓整理簡報」『文物』2004年第8期 文物出版社
- 岸俊男 1966「紀氏に関する一試考」『日本古代政治史研究』塙書房
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004『集安高句麗王陵-1990~2003年集安高句麗王陵調査報告』文物出版社
- 金美淑 2004「嶺南地域出土馬冑に関する研究」『嶺南文化財研究』17号
- 慶尚大學校博物館 1990『陝川玉田古墳群Ⅱ M3号墳』慶尚大學校博物館調査報告第6輯
- 慶尚大學校博物館 1992『陝川玉田古墳群Ⅲ M1・M2号墳』慶尚大學校博物館調査報告第7輯
- 慶尚大學校博物館 1997『陝川玉田古墳群Ⅳ 23・28号墳』慶尚大學校博物館研究叢書第16輯
- 慶尚大學校博物館 1999『陝川玉田古墳群Ⅴ 5・7・35号墳』慶尚大學校博物館研究叢書第21輯
- 慶星大學校博物館 2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』慶星大學校博物館研究叢書第4輯
- 国立金海博物館 2002『韓国古代の鎧と冑』
- 国立昌原文化財研究所・咸安郡 2002『咸安 馬甲塚』学術調査報告第15輯
- 国立晋州博物館 1997『陝川礪溪堤カA号墳』
- 小林謙一 1990「歩兵と騎兵」『古墳時代の工芸』古代史復元7 講談社
- 小林行雄 1964「紐綴結合」『続古代の技術』塙選書 塙書房
- 湖北省博物館 1989『曾侯乙墓』文物出版社
- 齊藤忠 1937「慶州皇南里第109号墳皇吾里第14号墳調査報告」『昭和9年度古蹟調査報告』第1冊 朝鮮総督府
- 申敬澈 1987「釜山連山洞8号墳発掘調査概報」『釜山直轄市立博物館年報』第10輯
- 始皇陵考古隊 2001「秦始皇陵園K9801陪葬坑第一次試掘簡報」『考古与文物』2001年第1期
- セゾン美術館 1999『シルクロードの都 長安の秘宝』日本経済新聞社
- 藺田香融 1970「古代海上交通と紀伊の水軍」『古代の日本』5 角川書店
- 巽善信 1995「東アジアの馬冑」『古代文化』47-5(436号) 古代学協会
- 田立坤・張克挙 1997「前燕的甲騎具装」『文物』1997年第11期 文物出版社
- 田立坤 1999「北票喇嘛洞墓地的初步認識」 奈文研講演会発表資料より
- 樋口隆康・西谷真治・小野山節 1959『大谷古墳』和歌山市教育委員会
- 釜山大學校博物館 1982『福泉洞古墳群』1 遺跡調査報告第5輯
- 桃崎裕輔 2005「東アジア騎馬文化の系譜-五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして-」研究発表5-馬具研究と「系譜論」『馬具研究のまなざし』-研究史と方法論- 古代武器研究会・鉄器文化研究会連合研究集会

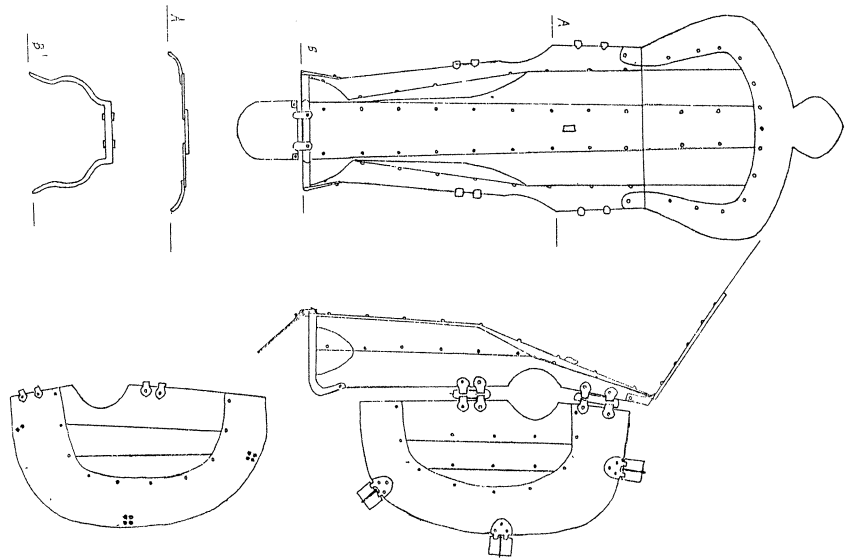
- 野洲町教育委員会 2001『史跡大岩山古墳群 天王山古墳・円山古墳・甲山古墳調査整備報告書』
- 楊弘 1985「9章 南北朝の「襴襜」鎧「具装」鎧」『中国古兵器論叢』関大出版部
- 李尚律 1999「加耶の馬冑」『加耶の対外交渉』第5回加耶史学術会議 金海市
- 李尚律／金井塚良一訳 2000「加耶の馬冑」『研究紀要』第4号 山武考古学研究所
- 黎搖渤 1973「遼寧北票西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973年第3期 文物出版社
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽十二台郷磚廠88M1発掘簡報」『文物』1997年第11期
文物出版社
- 遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』遼寧人民出版社
- 遼寧省文物考古研究所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」『考古学報』2004年第2期 科学
出版社
- 若松良一 1991「埼玉将軍塚出土の馬冑」『調査研究報告』4号 埼玉県立さきたま資料館
- 和歌山市立博物館 2001『渡来文化の波－5～6世紀の紀伊国を探る－』

【図出典】

- 図1-1・2：遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館1997、1-3：神谷作図
- 図2-1・2：吉林文物考古研究所・集安市博物館2004
- 図3-1・2：伊藤秋雄1993、3-3：李尚律1999、3-4：釜山大學校博物館1982
- 図4-1・2：国立昌原文化財研究所・咸安郡2002、4-3・4：慶尚大學校博物館1997
- 図5-1・2：慶尚大學校博物館1990、5-3～5：慶尚大學校博物館1992
- 図6-1：慶尚大學校博物館1997、6-2：慶尚大學校博物館1999、6-3：国立晋州博物館1997
- 図7-1～3：和歌山市教育委員会1959、7-4：若松良一 1991、7-5：野洲町教育委員会2001
- 図8-1・2：湖北省博物館1989、8-3：陝西 2001、8-4：楊弘1985
- 図9-1・2：咸陽市文物考古研究所2004、9-3：セゾン美術館1999
- 図10：神谷作図

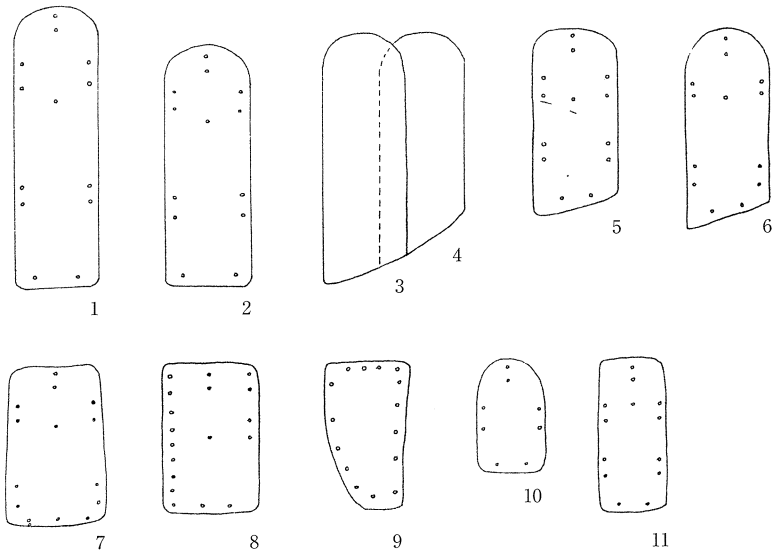
中国・韓国・日本出土の馬胄と馬甲一覧表

中国の馬胄・馬甲															文献	備考	
出土古墳	馬胄 馬甲	年代	全長	面覆部 最大幅	幅/鼻先 高さ	眼孔 長/短徑	底部 高/幅	鐵板 厚さ	鐵板使用 枚数	鉄頭 直徑	鉄 間隔	鉄 使用数	管金具 全長/幅	頬當 全長/幅			
1	北燕馮素弗墓	馬胄 馬甲	5世紀 初頭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黎搖渤 1973		
2	朝陽十二台 郷 磚廠88M1号墓	馬胄 馬甲	4世紀 後半	66.0	29.6	16.0 11.0	7.4	25.0 30.0	0.2	15	0.5— 0.6	4—4.5	121	—	36.5 18.7	遼寧省文物考古研究所・ 朝陽市博物館 1997	
3	北票喇嘛洞 I M17号墓	馬胄 馬甲	4世紀 後半	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	田立坤 1999	
4	禹山992號墳	馬胄	4世紀 後半頃	—	—	—	—	14.0 25.0	0.1	—	0.4	2—3	—	—	—	吉林省文物考古研究所・ 集安市博物館 2004	
5	太王陵	馬甲	5世紀 初頭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	吉林省文物考古研究所・ 集安市博物館 2004	
6	麻線2100号墓	馬甲	5世紀 初頭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	吉林省文物考古研究所・ 集安市博物館 2004	
7	千秋塚	馬甲	4世紀 末	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	吉林省文物考古研究所・ 集安市博物館 2004	
韓国の馬胄・馬甲															文献	備考	
出土古墳	馬胄 馬甲	年代	全長	面覆部 最大幅	幅/鼻先 高さ	眼孔 長/短徑	底部 高/幅	鐵板 厚さ	鐵板使用 枚数	鉄頭 直徑	鉄 間隔	鉄 使用数	管金具 全長/幅	頬當 全長/幅			
8	福泉洞10号墳	馬胄	5世紀 中頃	51.6	24.4	13.0 9.3	9.2 7.3	17.0 21.3	0.2	19	0.5	2.4— 3.4	138	3.7 3.9	31.3 16.2	釜山大學校博物館 1982	
9	福泉洞34・ 35・36号墳	馬甲	5世紀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	釜山大學校博物館申敬澈 氏のご教示による	
13	玉田M1号墳	馬胄 馬甲	5世紀 後半	52.0	24.0	19.7 4.4	11.0 8.0	11.8 24.0	0.15	13	0.4— 0.6	2—3.6	94 以上	—	39.4 18.3	慶尚大學校博物館 1992	
11	玉田M3号墳	A馬胄	5世紀 後半	49.5	22.0	20.5 7.0	9.0 8.0	14.0 40.0	0.1	10	0.3	1.3— 1.5	121 以上	1.6 3.5	—	慶尚大學校博物館 1990	管金具は2個である。
12	玉田M3号墳	B馬胄	5世紀 後半	36.5	27.2	—	9.0 5.5	9.2 38.0	0.2	7	0.25 以上	”	84 以上	3以上 3	23 15	慶尚大學校博物館 1990	
14	玉田23号墳	馬胄	5世紀 前半	50.0 (推定)	29.0 (推定)	—	9.0 7.0 (推定)	12.0 36.0	0.2	8—10	0.5— 0.6	1.6— 2.0	—	—	27— 28	慶尚大學校博物館 1997	
10	玉田28号墳	馬胄 馬甲	5世紀 後半	55.2	—	17.6 10.8	9.0 7.2	22.0 34.2	0.2	8	0.3	1—2	126	—	—	慶尚大學校博物館 1997	使用数は面覆部は6枚類 当を入れて6枚になる。
15	玉田35号墳	馬胄	5世紀 後半	45.0 (推定)	—	—	10.0 6.0	10.0 19.0	0.1— 0.15	—	0.5	1	—	1.4 1.8	33 16	慶尚大學校博物館 1999	
16	杜谷洞8号墳	馬胄	5世紀 前半	—	—	16.0 1.0	9.4 7.0	—	0.2	—	0.5	2— 3.2	—	—	33 15	李尚律 1999	
17	威安馬甲塚	馬胄 馬甲	5世紀 中頃	—	—	—	—	12.0 以上	0.1— 0.15	—	0.4— 0.5	2— 4.4	—	—	—	国立昌原文化財研究所 2002	
18	威安道項里 8號墳	馬胄 馬甲	6世紀 前半～ 中頃	—	—	—	—	—	—	—	—	約2.0	—	—	—	国立昌原文化財研究所李 柱憲氏のご教示による	
19	大成洞1号墳	馬胄	5世紀 前半	45.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	慶星大學校博物館 2000・ 国立金海博物館 2002	
20	大成洞11号墳	馬甲	5世紀 前半	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	釜山大學校博物館申敬澈 氏のご教示による	
21	蓮山洞8号墳	馬胄	5世紀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	申敬澈 1987	
22	皇南洞109号墳	馬胄 馬甲	4世紀末～ 5世紀初頭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	伊藤秋雄 1993	
23	舍羅里45号墳	馬胄	5世紀 初頭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	金美淑 2004	
24	礪溪堤古墳群 力A号墳	馬胄	5世紀 後半 ～末	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	国立晋州博物館 1997	
日本の馬胄・馬甲															文献	備考	
出土古墳	馬胄 馬甲	年代	全長	面覆部 最大幅	幅/鼻先 高さ	眼孔 長/短徑	底部 高/幅	鐵板 厚さ	鐵板使用 枚数	鉄頭 直徑	鉄 間隔	鉄 使用数	管金具 全長/幅	頬當 全長/幅			
25	大谷古墳	馬胄 馬甲	5世紀末～ 6世紀初頭	52.6	24.5	21.0 8.4	8.0 6.5	15.3 40.0	0.2	11	0.5	1.6— 2.0	146	4.7 3.8	24.5 12.2	樋口隆康・西谷真治・ 小野山節 1959	
26	將軍山古墳	馬胄	6世紀 後半	41.6 (推定)	27.0 (推定)	14.6 (推定)	9.4 6.5	—	0.2	19 (推定)	0.4— 0.5	1.2 (平均)	156以上 (推定)	—	—	若松良一 1991	使用枚数は面覆のみ推定 である
27	甲山古墳	馬甲	6世紀 後半	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	野洲町教育委員会 2001	盗掘のため詳細不明



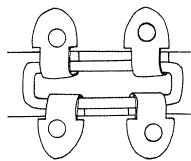
1. 十二台郷磚廠88M1号墓馬胄

0 50cm



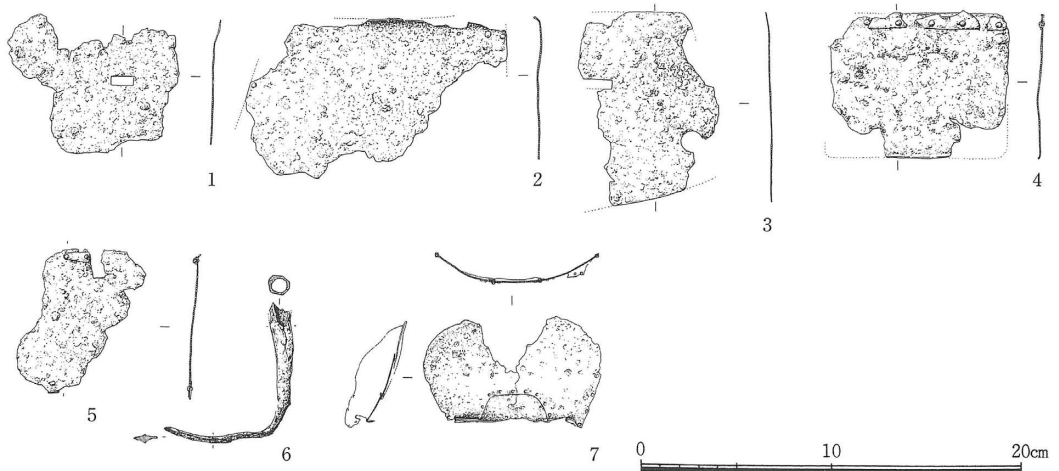
2. 十二台郷磚廠88M1号墓馬甲小札

0 10 20cm

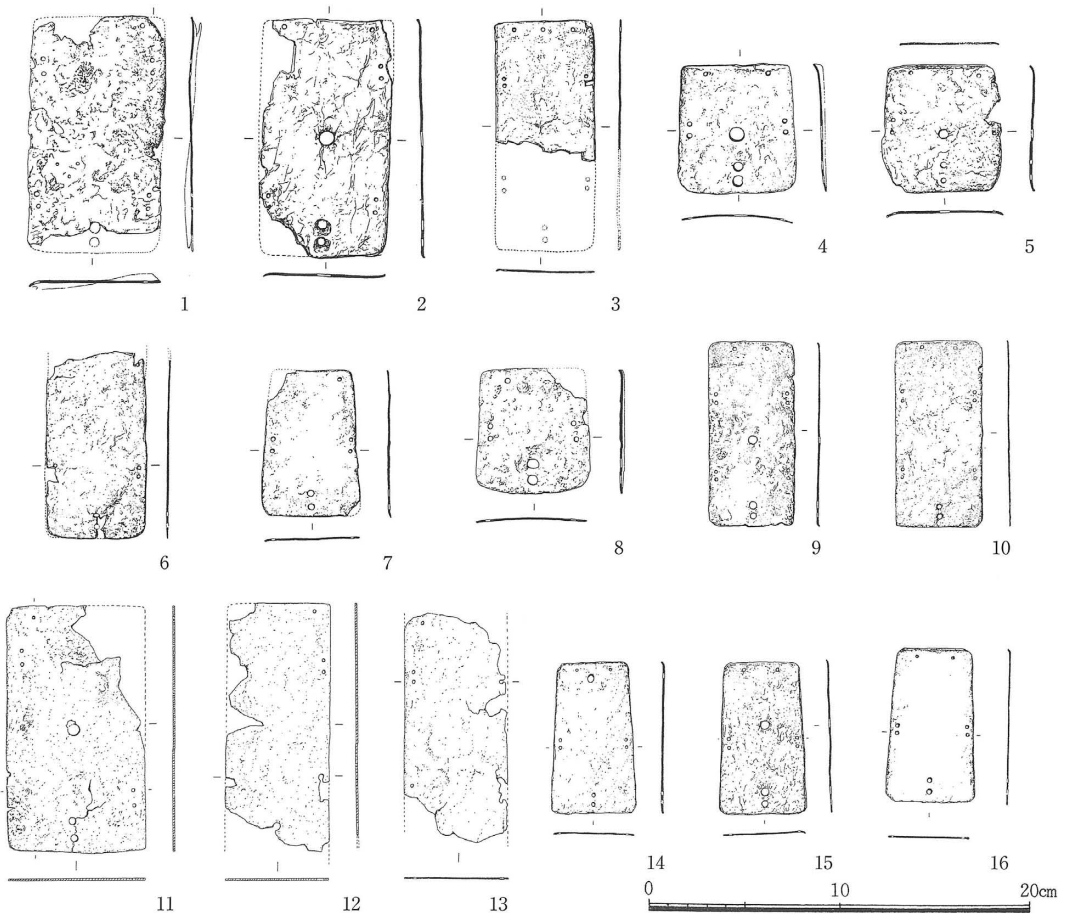


3. 十二台郷磚廠88M1号墓馬胄面覆部と頬当の連結法 (S=約1/3)

図1 中国遼寧省朝陽市域出土の馬胄・馬甲

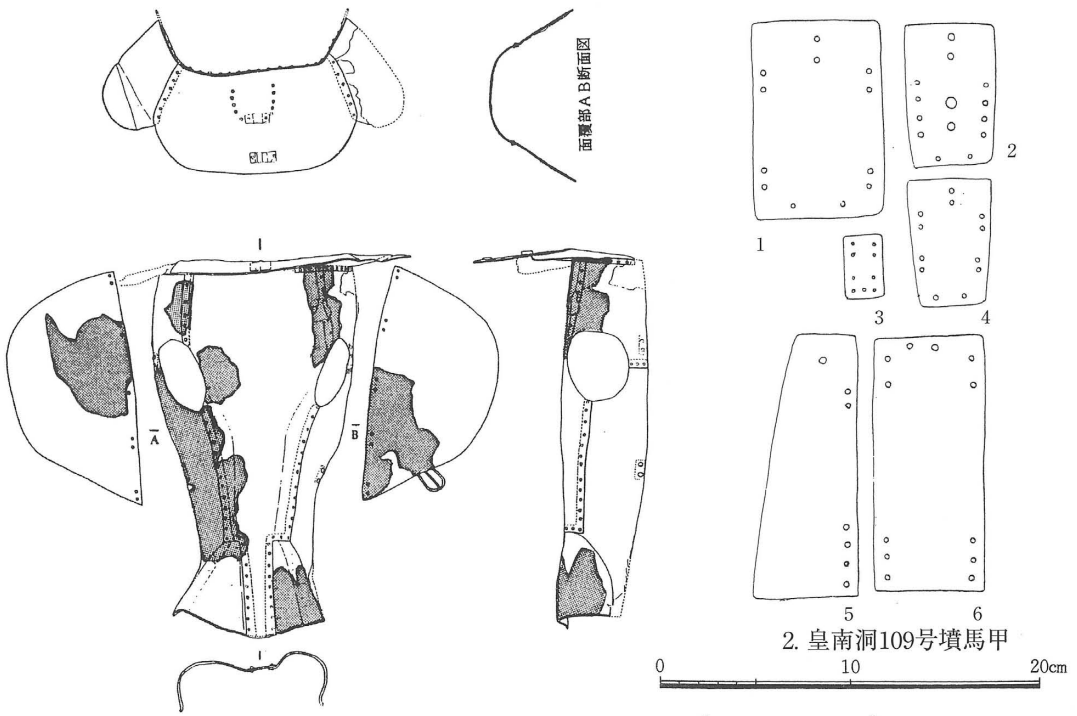


1. 南山992号墓鉄製馬冑他鉄器類

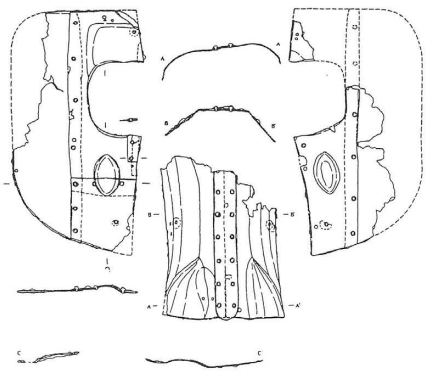


2. 大王陵(1~8)、麻線2100号墳(9~13)、千秋墓(14~16)馬甲小札

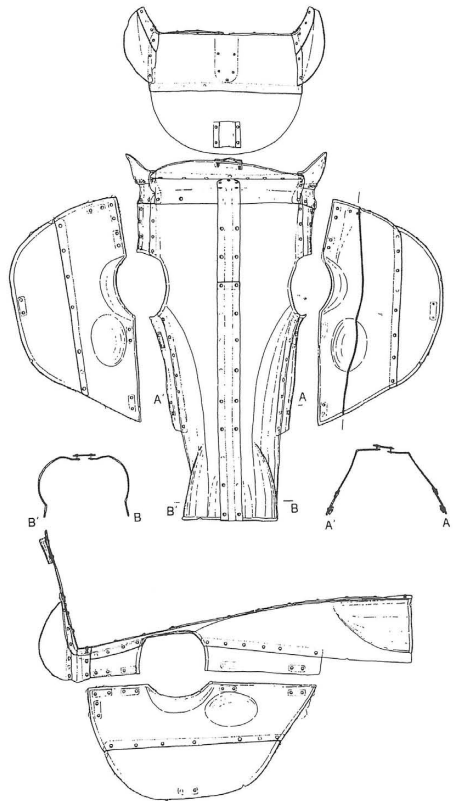
図2 中国吉林省集安市出土の馬冑・馬甲



1. 皇南洞109号墳馬胄

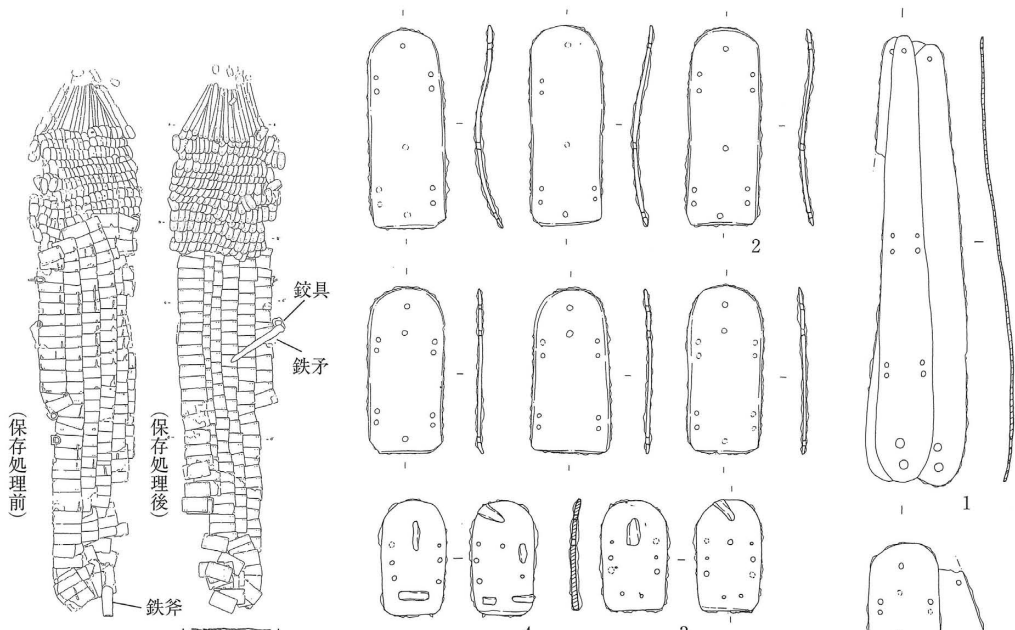


3. 金海杜谷8号墳馬胄



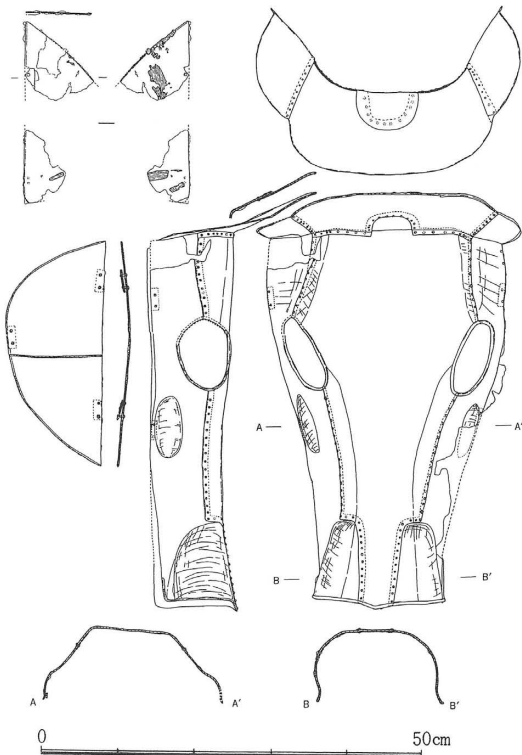
4. 福泉洞10号墳馬胄

図3 韓国出土の馬胄・馬甲(1)

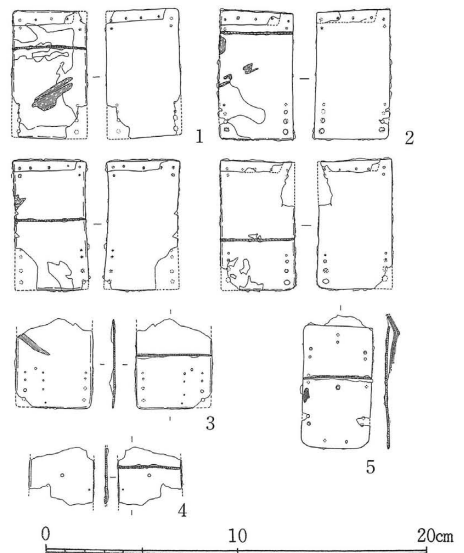


1. 咸安馬甲塚馬甲

2. 咸安馬甲塚馬甲小札

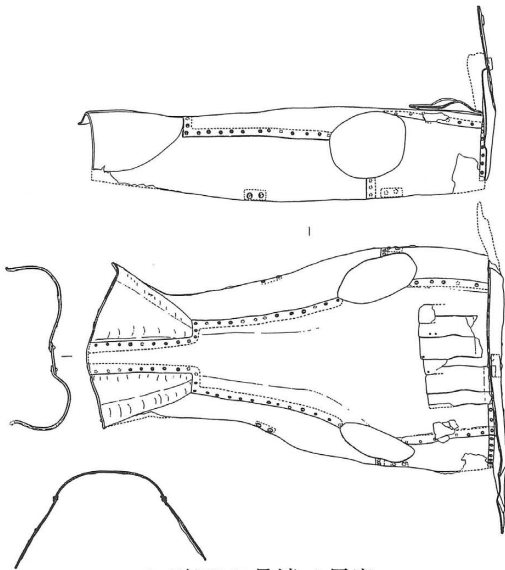


3. 玉田28号墳馬冑

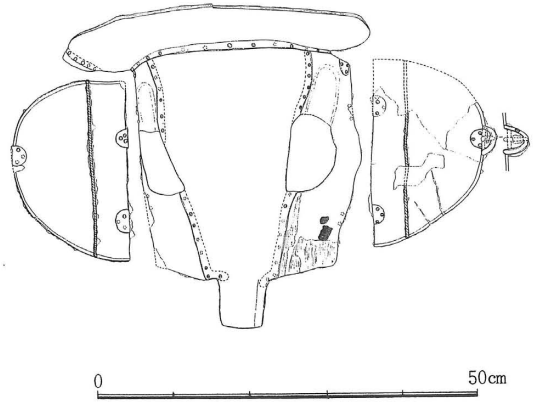


4. 玉田28号墳馬甲小札

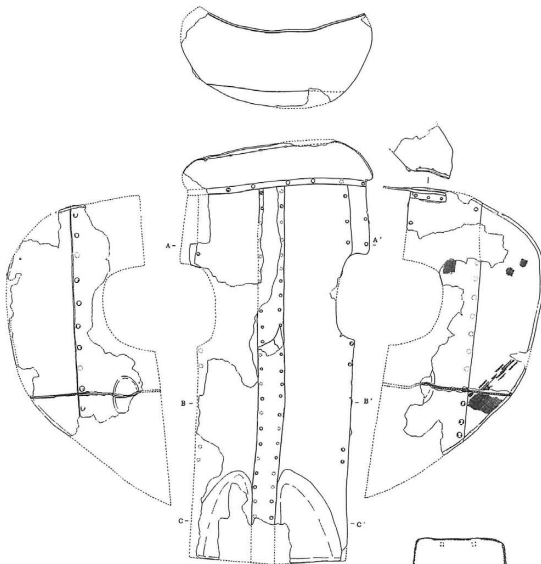
図4 韓国出土の馬冑・馬甲(2)



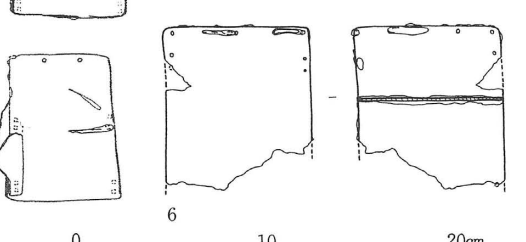
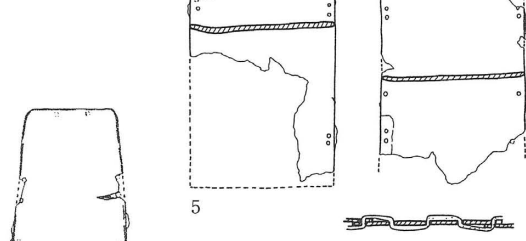
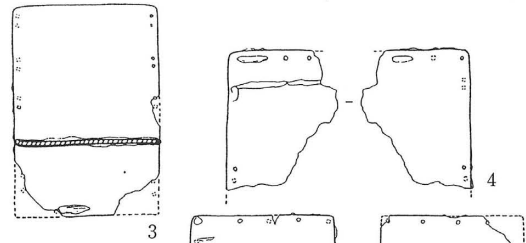
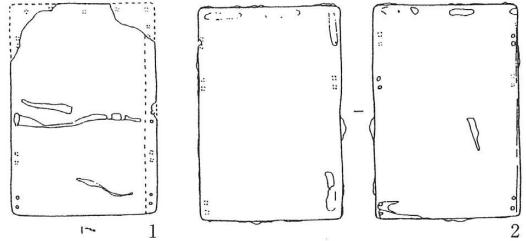
1. 玉田M3号墳 A馬冑



2. 玉田M3号墳 B馬冑



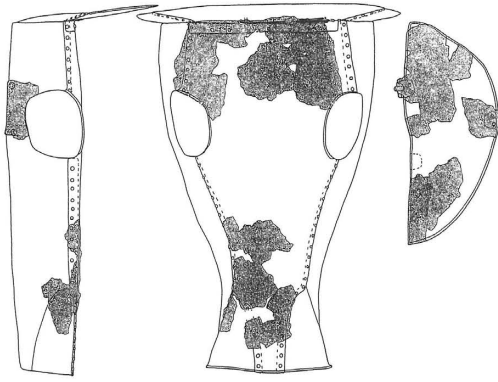
3. 玉田M1号墳馬冑



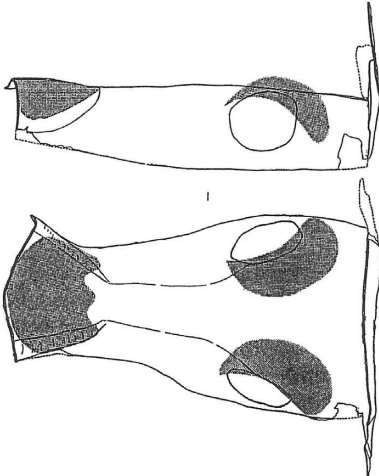
5. 玉田M1号墳
大型小札の威法

0 10 20cm

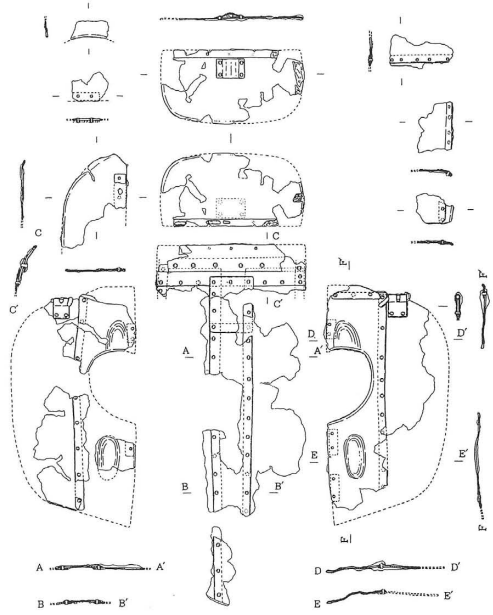
図5 韓国出土の馬冑・馬甲(3) 4. 玉田M1号墳馬甲小札



1. 玉田23号墳馬冑

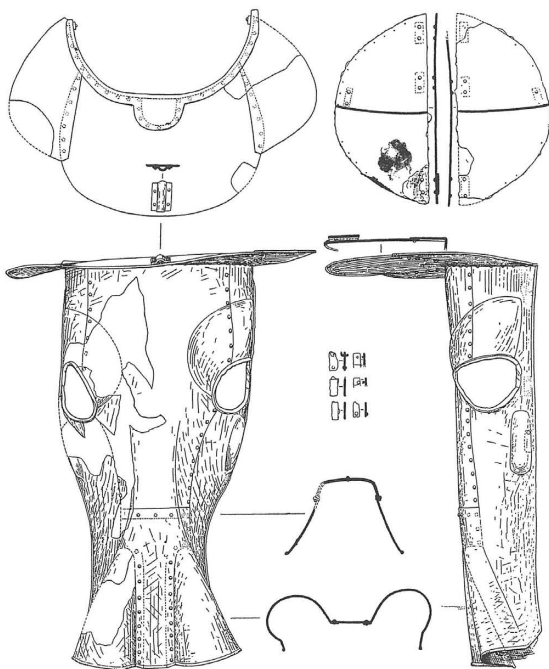


3. 陝川礪溪堤力 A号墳 鉄革合成馬冑

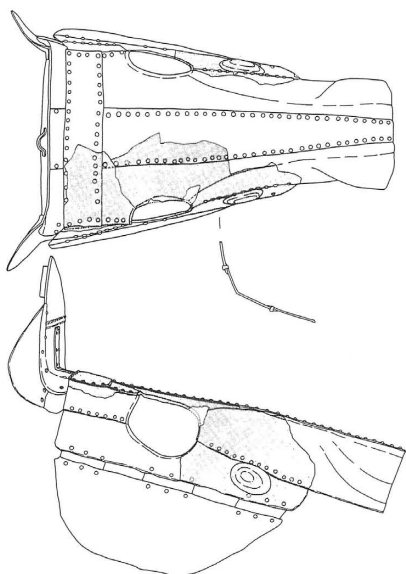


2. 玉田35号墳馬冑

図6 韓国出土の馬冑・馬甲(4)

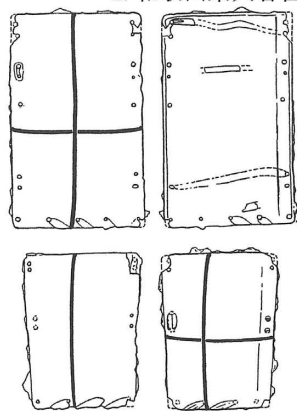


1. 和歌山県大谷古墳馬冑

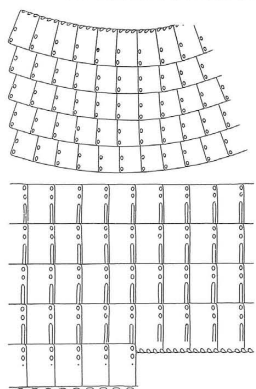
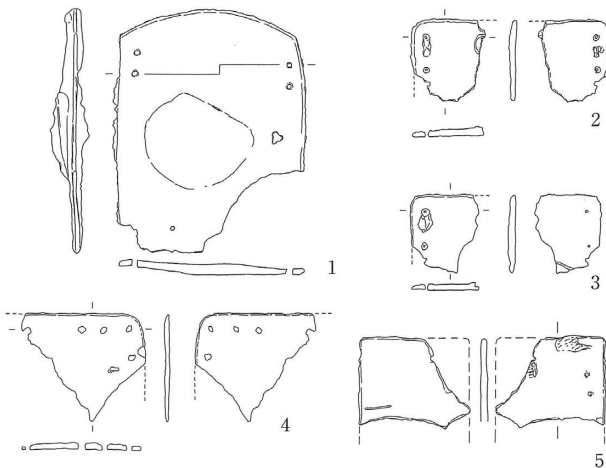


0 50cm

4. 埼玉県將軍山古墳馬冑



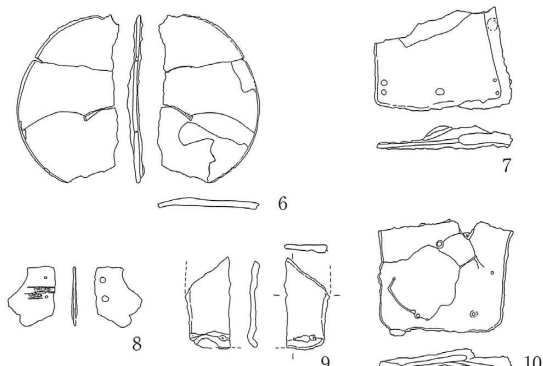
2. 和歌山県大谷古墳馬甲小札



馬首・馬胸部
・馬尻用馬甲

馬胴部用馬甲

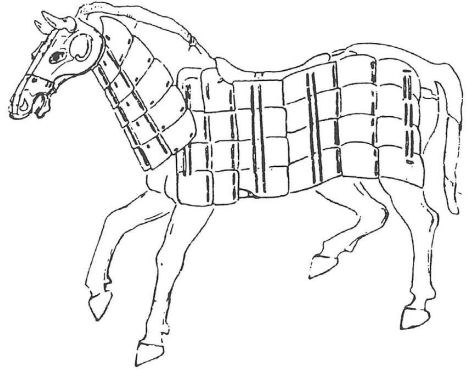
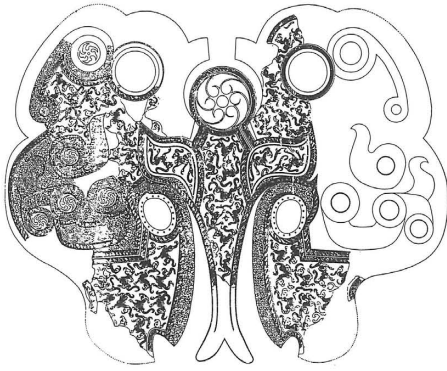
3. 和歌山県大谷古墳
馬甲小札葺法想定図



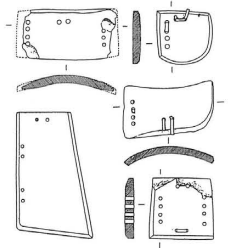
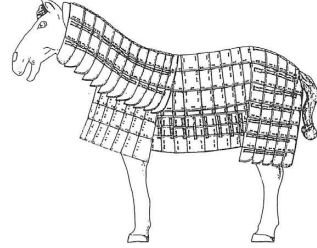
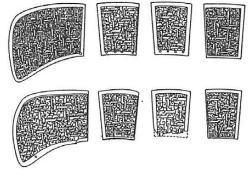
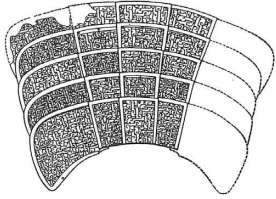
0 10 20cm

図7 日本出土の馬冑・馬甲

5. 滋賀県甲山古墳
馬甲小札

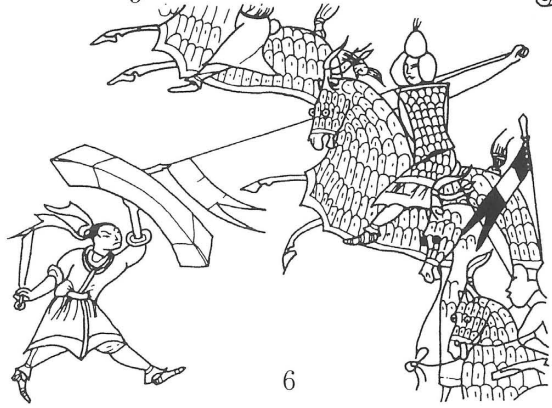
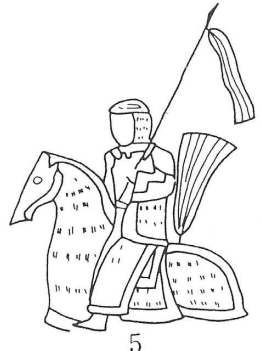


2. 曾侯乙墓出土IV号馬胄・馬甲の復元図



1. 湖北省隋県曾侯乙墓出土IV号馬胄(革製)

3. 秦兵馬俑坑 石製馬甲復元図、石製馬甲小札



1. 長沙西晋墓の陶馬
2. 上海博物館蔵の北魏陶俑
3. 東晋霜承嗣壁画
4. 冬寿墓壁画
5. 麦積山麦察127窟北魏壁画
6. 敦煌285窟西魏壁画

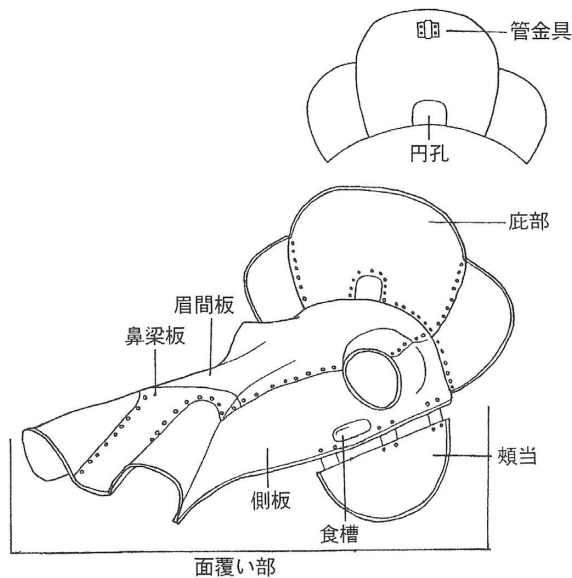
4. 西晋の馬当胸と東晋南北朝の甲騎具装

図8 馬胄・馬甲の起源



1. 褐釉馬甲俑(咸陽平陵十六国墓出土) 2. 彩色馬甲俑(同) 3. 加彩貼金鍍甲男子騎馬俑(懿德太子墓出土)

図9 馬俑に表現された馬甲



馬胄部分名称
(大谷古墳馬胄を)
基本とした。

図10 馬胄の部分名称